青鞜

二月號

明治四十五年二月一日發行（毎月一回一日發行） 第二卷
明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可 第二號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第二巻第二號目次

小唄……一……しぐれ
叔父ワーニヤ（脚本）……五……瀬沼夏葉譯
無題（詩）……一四……與謝野晶
人の夫（小説）……一七……神崎恒
その折々（短歌）……二五……原田琴
他人の子（小説）……二九……木内錠
冴え返る（俳句）……四一……白雨
枯草（小説）……四三……岩野清
闇の花（戯曲）……五三……荒木郁
心の事實……七六……らいてう記
赤き死の假面……八三……ポオ
食後（小説）……九七……水野仙
編輯室より（新年會記事）……
……一〇一……係
表紙繪……長沼智惠

青鞜

四十五年二月一日

第二巻第二號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小唄

しぐれ

秋の袷とならばなれ、
どう寒風が吹きとほさうと
肩がぬけようとすきぎれしようと
昔のいろのこいはなだ
あだにやとくまい裏おもて

しんくの絲でつづろもの。

□

薄墨の香がにほふ後れ毛
あのゑりもとへとけこんで
しつぽりとした曉の
いろにうるんだ初花さくら、
それは綸か、夢の
かわゆい瞳の八百屋のお七。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

□

松の薬になろぞへ、
散つてもめをと
いろもいつまでかはらずに。
さりとて
情が枯れたのちまで
ついてゐるのはいやぢやぞへ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

□

薄霜こほるみぎはに
千鳥めが殘してゆくか
胸にさびしいものの影。
みつぎたのむといふてきた
うらぶれ姿、むかしの姿、
もう三十三、紅屋のむすめ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

脚本

叔父ワーニヤ

瀬沼夏葉譯

人物

アレクサンドル、ウラヂミロヰチ、セレブリヤコフ（退職プロフエッサー）

エレナ、アンドレエウナ、（セレブリヤコフ夫人廿七歳）

ソヒヤ、アレクサンドロウナ、（ソーニヤ）（セレブリヤコフ先妻の娘）

マリヤ、ワシリエウナ、チイニツカヤ、（樞密顧問官未亡人セレブリヤコフ先妻の母）

イワン、ペトロヰチ、チイニツキイ（未亡人の子息）

ミハイル、リチーヰチ、アストロフ、（醫學士）

イリヤ、イリヰチ、テレエギン、（破産した大地主）

マリナ、（年寄の乳母）

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其他労働人數名

第一幕

一

庭園の彼方にヱランダのある家の一隅が見え、並木道のトポリの老樹の蔭に、茶道具の備てある一脚のテーブルと、所々に椅子や、腰掛が据ゑられてゐる。而して一つの腰掛にギタッが置いてあつてテーブルから遠くない所に鞦韆(ブランコ)がある。凡て別莊の庭園の趣き。時は晝の三時。
染垂(シミタレ)な、はき〳〵しない、年寄の乳母のマリナはサモワルの前に腰を掛けて、靴下を編んでゐる。其側を醫學士のアストロフが歩いてゐる。

マリナ。（盃(コップ)に茶を注いで）さあ召上れ、旦那様！

アストロフ。（進まぬ氣味に盃を取上げながら）何だか飲みたくもないなあ。

マリナ。それぢやウォッカでも召上りますか？

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アストロフ。　ウヽム、　僕は毎日ウォッカは遣らんよ。　其れに何んだかどうも氣が慿う塞いて（間）したが老婆や、もう何年になるだらうなあ、僕等が懇意になつてから？

マリナ。（考へながら）さうですね、何年かねえ、えヽと……お前樣が此所に初めてお出たのは……えヽ何時だつたつけ……さうさ、未だ先のソーニャ樣のお母樣のウエラ、ペトロウナ樣が生きてお出の時分さ……其時にお前樣二冬此所へお越しにおなりだつた……すると丁度十一年目てさ（又考へながら）それともひよッとしたらもつとになるかも知れない。

アストロフ。其頃から見ると、僕、酷く變つたらう？

マリナ。そりや酷く變りましたわな、其の頃はお前樣、若くて美い男でさ、だがもう今ぢやずつと老けてお了ひなすつた、さう云つちや何てすが、御容貌だつて落ちましたよ、最もウォッカを召上るからでもあらうけれどね……

アストロフ。さうだらう、十年と云へば一昔、もう全て別人さ。然しそれにや譯も亦大にあるのさ。隨分骨を折るからなあ、老婆！朝から晩まで息まず驅け廻り通し、而して夜は夜で、寢床に入つても未だ病家のことが、慿うか、那かと案じられる、招びに遣つて來られやしないかと氣に懸る。本當に此所へても來てゐる時の外は、そり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

や一日中、全然少しだつて暇はないのさ、老けもする筈ぢやないか？さうして又生活其物が既に退屈なものさ馬鹿げてゐるものさ、汚らはしいものさ……たゞ無暗にだら〳〵と長たらしく續いて、周圍には周圍で、皆べた一面眞人間とは受取れない半狂人ばつかりだ。其りや未だしも、二年と三年其中にまご〳〵してゐやうものなら、御自分樣がそろ〳〵眞人間ではなくなつて來るのには恐れる。これが遁げやうにも遁げられん運命と云ふ奴だ。（彼は自分の長い髭を捻りながら）恐しい髭になつたものだなあ、間の拔けた髭だ、馬鹿髭だ。いや老婆や、實を云ふと僕もね、猶且眞人間ぢやどうもなくなつたやうだよ、と云つたつて全然愚になつて了つたと云ふ譯でもないがね、仕合と腦髓だけはまだ確かだが、感情と來たら、全で手も着けられん。鈍いの何んのと云つてお話にも成らんよ、何にも欲しくもないし、何にも入りもしないし、誰あれも愛しもしやしない…… いやね老婆や、たゞお前ばかりは好だよ（乳母の頭を接吻する）僕のまだ小供の時分丁度お前のやうな乳母がゐたつけ。

マリナ。何か旦那樣それでも召上りたかありませんか？

アストロフ。いや欲しくないよ。さうさ前のことだつけが、大齋（パスハ大祭の前に四十日の大齋あり）の三週間目の時だつた、僕はマリッコイ村にね行つたが劇烈な傳染病の流行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て、瘢疹チフス……藁屋の中に幾人となく、皆頭を並べたまゝ倒れてゐる……汚物やら……臭氣やら……烟やら……それはお話にならんよ。小牛どもが其所に矢張一所に轉がつてゐるかと思ふと、家の子も向ふの隅にはゐると云ふ始末ぢやないか……終日中(イチニチヂウ)全て腰も下さず、水一滴口にも入れずで病人いぢりさ。其れからやう〳〵家に歸つて來た所、いやもう……歸つて來るより早く、どうだらう、鐵道の人夫の怪我人を擔ぎ込まれたぢやないか。息を繼くまもなくさ。だが仕方がない、又其怪我人を手術臺に上せて、而して手術にかゝつたさ。所がだ、運惡く其男が麻睡劑の爲に參つて了つたのよ。すると又入りもせん時には生憎と感情の奴が興奮して來てからに、いやと云ふ程、良心は刺戟される。恰も故と其男を殺してもしたかのやうにね……僕、其時ばかりは實にもう堪らなくなつて、どつかりと椅子に倒れて了つて、眼を潰つて考込んだよ……あゝ、百年、二百年我々の後の人間の爲に、恰今我々は、道を開拓いてやつてゐるやうなものだ、さうして後の人間は果して我々のことを恩とするか、思ひ起すか……あゝ乳母！どうせ記念するなんてことはないだらうなあ！

マリナ。なにお前樣、人が記念しなけりやね神樣が記念なさいますさ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アストロフ。そいつあ有難う。成程、成程。（チイニツヤイ登場）

ヲイニツキイ。（彼は朝飯後、ぐつすりと寢て寢くたびれた體裁で、家より出て來る。腰掛に腰を下し、其ハイカラの襟飾等を直す。）さう……（間）あゝあ……

アストロフ。充分寢たかい？

ヲイニツキイ。あゝ、うんと寢た。（欠伸する）プロヘッサーが夫婦で此所に遣つて來てからと云ふものは、全て我々の生活は、軌道から脱れて了つたのよ。中食後でもない朝つぱらから寢轉だり、旨い物を食ひたい放題、酒を飮みたい放題、健康は害ねるぼかりさ、前には少しも隙なぞはなかつた、我輩もソーニヤも働き通しだつた、結構によ。然し今はもうソーニヤばつかり働くので、我輩はたゞ寢る、食ふ、飮む……甚だ宜しくないよ！

マリナ。（頭を振りながら）お極りのよいことつたらないのさお家の有樣は！先生はまあ十二時にお目覺めになる。サモワルなんざ貴方、朝からちん〳〵とたぎつてゐるではありませんか。皆樣は皆先生方のお出を待つてお茶を控へてお出てせう、十二時が一時まで　、前には貴方、もう十二時過ぎと云へば世間並みに中食を爲たものでしたのに、今ぢや中食が大抵六時過ぎ、夜は夜て先生が又晩くまで、御本のお調べやら、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お書き物だらう。それはまだしも時偶夜の一時過ぎの突ぺつもない刻限に呼鈴が鳴るぢやありませんか……ハイ何御用で先生樣……と申上ると……茶を呉れ！いやはや！先生の爲に誰か人が一人、夜、夜中でも起きてゐてサモワルの用意をしてゐにやならんと云ふやうな譯ですわさ……何とお極りのよいことだか！

アストロフ。プロフッサーは何かい、長く此所にお居でなのかい？

ヲイニツキイ。（ヒーと口笛を鳴らして）百年だ！プロフエッサーは此所にもう一生住むことになつたのよ。

マリナ。まあ御覧なさい、今だつてそら、サモワルがもう卓の上に二時間も据ゑられてゐますのに、先生方は散歩に行らしつてると云ふのぢやありませんか。

ヲイニツキイ。歸つて來た、歸つて來た……さうやきもきせんでもよいさ。

（庭園の彼方の繁みより散歩に行つた連中の歸つて來る聲がする。やがてセレブリヤコフ、エレナ、アンドレエウナ。ソーニヤ。テレエギン登場）

セレブリヤコフ。實に好い、實に好い、何とも云はれない景色だ。

テレエギン。全く左樣ですな、何とも立派な景色で、どうも閣下。

ソーニヤ。私等明日ね山林管理所へ行つて見ませうと思ふの、お父樣入らつしやいません

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か？

ヲイニッキイ。皆様お茶です！

セレブリャコフ。君、茶をとうか我輩の書齋に持たして下さい、どうか！今日は我輩仕事があるのだから。

ソーニャ。ねえ、お父様、山林管理所は乾度お父様にお氣に入るのよ……

（エレナ、アンドレエウナ。セレブリャコフソーニャ家に入る。テレエギン腰掛の所に來て、マリナの傍に掛ける。）

ヲイニッキイ。暑苦しい！大學者先生、此の陽氣に、外套やら、上靴やら、傘は持つ、手袋はする。

アストロフ。さうして見ると餘程身體を大切がつてゐると見えるね。

ヲイニッキイ。實に好い女だなあ、何て好い女だらう。我輩生れてからまだ那麽美人を見たことがない。

テレエギン。どうも何ですなマリナ、テモフェツナ樣、郊外に乘り廻しても、かう、綠の深い庭園を散步致しても、何とも云はれません位愉快ですな、お天氣は這麽に玉のやうな日和てからに、而して皆我々かうして睦じく、お互に平和に暮してゐるなん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ぞは、實に以て、もう此の上に何にも入りやしませんよ（茶の、コップを取上げながら）いや
どうも大きに〳〵御馳走さま、私は大きに貴方に謝しますよ。

ヲイニツキイ。（空想に憧がれて恍惚としながら）あの眼色……いゝ女だなあー！

アストロフ。何か話をしちやどうです、イワン、ペトローヰチ君。

ヲイニツキイ。（頽然として）何を話すのか？

アストロフ。何か珍聞はないかね、何か？

ヲイニツキイ。何があるものか。珍らしいことなんぞ、舊から見りや人間が落ちるばかりさ。何もしない怠者になつてからに、たゞぶい〳〵と小言ばかりを並べてゐる厄介ものになつちまつたよ。家の叉母親の年寄鳥と云つたら、今も矢張例の女權擴張論に夢中でたゞ其事ばかりを喋り立てゝゐるには閉口する。もう片目ぢや墓場を見てゐながら、まだ片方の目ぢや頻りと新世界の曙光を其崇拜してゐる書物から探し出さうとしてゐるのだ。

——未完——

チエホフ作

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

無題

あきら

わが知れる一柱の神の御名を讃へまつる。
あはれ缺けざることなき「孤獨清貧」の御靈、
グレンドウの命よ。

グレンドウの命にも着け給ふ衣あり。
よれよれの皺の波、酒染の雲、
煙草の燒痕の霰模樣。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もとより痩せに痩せ給へば、
衣を透して乾物の如く骨だちぬ。
背丈の高きは冬の老木のむきだしなる如し。

グレンドウの命の顳顬は音樂なり。
斷えず不思議なる何事をか彈きぬ。
どす黑く青き筋肉の蛇の節廻し。

わが知れる藝術家の集りて
女と酒のある處、
グレンドウの命必ず風の如く來りて罵り給ふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何處より來給ふや、知り難し。
一所不住の神なり。
きちがひ茄子の夢の如く過ぎ給ふ神なり。
グレンドゥの命の御言葉の荒さよ。
人皆その眷屬の如くないがしろに呼ばれながら、
猶この神と笑ひ興ずるを喜びぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人の夫

神崎恒

小夜子は病室のベッドに腰をかけて、力なく片手を後に突いたまゝ凝と眼を床に注いで居た、先刻片桐を迎へに行つた安井はまだ歸つて來ない。三幕目はもう開いて居るのでひつそりと靜まり反つた廊下を、折々通る人の足音が恐ろしく耳についた。僅かの距離だが此室はまるで劇場と云ふものゝ空氣から引離された別世界である。藥の棚とテーブルとがキチンと一方に片附けられて居るより外、道具らしい道具もない、入口にかけてある醫師の外套らしいのが、黑い影をぼんやりと白壁に寫して居るのも淋しかつた。小夜子は金鎖の光る胸元から靑磁色のふきが白足袋の上に靡れた爪先まで、自分で自分の華やかな姿を見廻して、樂んで見に來た芝居の中で病室などへ這入らなければならない健康を悲しんだ、それと一所に又果てもなく痛んで行く自分の心が遣瀬ない程わびしく思はれた。明日

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にも茅ヶ崎の別莊へ遣られて、血を吐いて死ぬ迄其處に居なければならない。とう〳〵おしまひ迄自分は自分、片桐は片桐で終らなければならない。――ふとさう云ふ氣になり出した小夜子は、一寸の間でもいゝから男を妻子の執着から離れさせて、自分の傍に置きたいと云ふ欲望が烈しく起るのを禁め得なかつた。人の前では「先生」と云ふ言葉を殊更に用ゐさせる程用心深い片桐を、かう云ふ人目の多い場所でわざ〳〵呼び立てるのは、どんなにあの人を厭がらせるかを知らないではない、然し小夜子はそれを敢てしやうとして居る。今にも自分と云ふものが亡びて行く樣に思ふ小夜子は、とてもそんな遠慮はして居られなかつた。妻と云ふ鎖から男を引離さない中にもう自分が生の力を失つてしまふ樣な氣がして心は苛立つばかりであつた、先刻同じ樣に着飾つた友と前後して晴れがましい、見物席へ姿を見せた時、ふと特等席に居る片桐と視線が合つた刹那、小夜子は限りない心の滿足を覺えた。然しそれはほんの一刹那だつた。次の刹那には惡夢に襲はれた樣な不安が總ての誇を打壞してしまつた。片桐の傍に並んだ細面の顏！遠目にも著しい眉の濃さと額の狹さ――それはかねて話に聞いた片桐の妻に違ゐなかつた。全身の血がグラ〳〵と頭に上りつめた小夜子は、嚙み切る樣に強く唇を嚙んで熱した瞳をぢつと片桐に集めた。然しもう其時片桐の姿は席を離れやうとして居たのであつた。何か訊ねる樣に振返る妻を見向きも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

せずにさつさと外へ出て行くのを、小夜子は追かけても行きたかつた。
「どうなすつたのよ、何をそんなに見てゐらつしやるの。」
と友に手を把られて我に返つた小夜子は何となく氣恥かしい樣な感じがした。
「今あすこにゐらしつたのは片桐雨村さんてせう？」
この何でもない友の間が胸を刳られる樣だつた。
「えゝ。」
「あれは奥樣？意氣なつくりなのね。」
「そのはづですとも。」
と我にもなく言葉に力がはいつた。
「おや？藝者だつたの？」
「いゝえ、杵屋おかくさんと云ふ長唄のお師匠さんの娘ですつて――よくは知りませんけど。」
又片桐の姿が目に入つたので小夜子の言葉は途切れた、二人の視線は一齊に片桐の方へ向つた。嫉妬に燃える瞳の鋭さは小夜子自身すら意識することが出來る程だつた。片桐はこれを避ける樣な態度に見えた。又努めて妻とも遠ざからうとして居る樣に思へた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「寂しき人々」の一幕をやつと見終つた小夜子は、檻から逃げる様に廊下に出たのであつた。然しとう〳〵片桐とは顔を合せずに次の幕になつた。またいやでも元の席に戻らねばならなかつた。片桐が妻と並んで居るのを見なければならなかつた。眩暈を起して倒れかかつたのは二幕目が濟んで間もない出來事である。

ぢつと顔を抑へてずつと以前に片桐の云つた言葉を思ひ出して見た。「私も寂しき人々の一人ですよ、貴女は私の爲めにマアルになつて下さるでせう？」さう云ふ囁きを聞いた時代の事がいろ〳〵と心に浮んで來る。然し何と云つても口で云つた事は事實より輕い。片桐が如何に言葉の上で自分を愛してくれても今現にあの人が妻と云ふものと離れずに居る事實をどうすることが出來やう。其の事實に向つて自分がどういふ力を加へる事が出來やう――小夜子は何處までも嫉ましさを癒し樣がなかつた。

ふと此方へ近づく足音に素早く居住居を直すと、片桐ではなくて見知らない八字髯の男を安井が連れて來た。

「片桐さんは席にお見えになりませんですが――」

と青服の半身を戶口から見せて氣の毒相に安井は云ふ。

「有難う、もう宜しうございます。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小夜子は落付いてさう答へた。八字髯は構はず椅子を小夜子の傍へ引よせて、

「何うなすつたのですか」

と訊いた。小夜子は少し迷惑相に、一寸眩暈がしたことを告げた。醫者は一わたり脈や舌を見て藥を盛り始める。隣室からは看護婦も來た。小夜子は少々仰山な扱ひに驚いた。心ではまだ片桐の來るのばかり待つて居る。醫者と看護婦に勸められて仕方なく小夜子はベットにねることにした。島田髷を氣にしながら枕を當てゝ横になると上から白い毛布をかけてくれる。看護婦はぬぎ捨てた縮緬の羽織を袖疊にして藥棚の上に載せた。

何となく心細さが胸に溢れて白いものゝ中に包まれて居る自分が悲しかつた。安井が再び姿を見せた時、小夜子は思はず毛布をはねのけて起き上つたのである。急ぎ足にはいつて來た片桐は默つてベッドの傍へ立つた。其の縞背廣の服を着た背の高い姿をぢつと見上げ見下ろして、小夜子は只取りすがりたい樣になつかしさを覺えた。

「どうしたんです？」

片桐は金縁眼鏡の光る眉根を少し顰めて居る。

「あの先刻眩暈がしたものですから——わざわざお呼び申してすみません。」

醫師と看護婦に氣を兼ねて、小夜子はどこまでも心にあることを默つて居なければなら

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なかつた。

「ぢや歸つたらいゝでせう。」

「えゝですけれども――一寸お話し申しいたいことが、」

と訴へる樣に云ふ小夜子の言葉を遮つて

「車を呼んで上げませう、えゝと小石川の何町でしたつけ。」

わざとらしく聞きかけながら片桐はさつさと室を出て行つた。小夜子も醫者や看護婦にはざつとお禮を云つたばかりで、急ぎ足に後を追つた。正面の入口のところには白いエプロンをかけた女や青服の男が、二三ヶ所に集まつて居る、その人達の注意深相な眼に送られるのが、小夜子は此上もなく辛かつた。やつと通拔けて南の入口近くに行くと向ふから片桐が戻つて來た。小夜子は手招きして廊下に待つて居た。

「御心配をかけて惡うございましたが是非お目にかゝりたかつたものですから。」

少し伏目になつた小夜子の眼は曇つて居た。

「もうなほりましたか」

流石に先刻より優しみのある聲だつた。

「いゝえ今のは何でもないのですけれど私少し心配ですの、此頃いよ〳〵本物になつた樣な

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣がしますから、きつと今夜でも早く歸れば家で早速茅ヶ崎へ行けと申すでせうと存じますわ、さうすればもうお目にかゝれないかも知れません。」

輕く胸のところを叩いて見せた小夜子は言葉の終るのと一所にはら〳〵涙を落した。

「馬鹿な……そんな事があるものですか肺病だなんてそんなはづはない。」

片桐は惱まし相に頭を振つた。

「いゝえきつとそれに違ゐありませんわ、何時の間にかこんな病氣になつてしまつたのですもの。」

さう云つて美しい大きな眼で片桐を見上げた時、男の胸には何とも云へない不安が起つた自分が傳染したのぢやないか――と云ふ――

「もう歸ります左樣なら！」

投げ出す樣に云ひながら足早やに步るき出した小夜子は、車に乘らうとして階段を下りた時、低く男の耳に囁いた。

「私と一所に其邊まで ゐらしつて下さいませんか？」

「さア、今は一寸困る。」

「奧樣と御一所だからでせうね。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小夜子の言葉は尖つて居た。

「そんな譯ぢやないが……」

片桐は言葉を濁した。舞臺の方では幕の下りるベルの音がした。

「左樣なら」

雪白なスカーフを自暴にぐる〳〵と卷きつけた小夜子は、忽ち俥の幌に顏を隱くした。

白く光る俥の輪が暗に消えるまで片桐は默つて見送つた。

――完――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

その折々

原田琴

黒髪のたくるる時こそ春ならめ君の國ゆゑとこ少女われ

うれしくも人の心のおほらかに空のごときを元朝に見る

春立てばものの美しあはれわが住まぬ世界を見るごときかな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人並にはれやかなれと初春はせめて衣を新らしくする

恨むべき大なるものあらざればただみづからの挽歌をよむ

男らの知らぬ世界を知るごとし少女がかづく黒髪のかぜ

わが爲に花のふるよと見て過ぎぬ戀しき人とありしころには

おもしろく君のみだせばわが心まだ新らしくなるごと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

きかな

眼を病めば黒き眼鏡におのが世の春もあやまつあさましきかな

これをまづ世のみだれとぞ泣くべけん君は君が家われはわが家に

王ありて國なきに似ん少女にて一人あるよりあはれなるなし

髮氷り瞳も氷る夜のごとしひとり泣く日にあへるこの冬

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あぢきなく行き詰りたる心地しぬおのれしばしばかへり見るため

戀といふ掟ての外に掟なきわが世はものの美しきかな

命あるほどのこととは話にも思はれがたき別れするかな

他人の子

木内錠

おるいは久しい間、油氣なしのパサケた束髮にして居た髮を今朝珍らしく日本髮に結ひ替へた清々しい氣持で窓の下に縫物を廣げた。

洗つていざ日本髮に結ふとなる迄もおるいは隨分迷ひぬいた。銀杏返しにしようか、痩せぎすで鶴のやうに背の高いおるいはたぼをツンとそらした細輪の銀杏返しに結ふと、甚くいきに見えるので「姉樣は全てお茶屋の女中みたいよ」と妹に迄からかはれる。結つて見たい事は結つて見たいが今から丸髷に結ふも變なもの、彼か是かと迷つた揚句、矢張前を引詰めて、襟首の處へ固めつけたクリスチアン風な平常の束髮で置かうかしらとも思ひ返したが、何でも替つたものに結つて見ないでは濟まないやうな氣がして、一生の中にももう二度と再び結はれないのだからと思ひ切つて、島田に結はせた。

他人が見たらもう今になつて島田でもなからうと笑はう、自分だつて、自分程な年齡ばえの者が此樣な娘々した高島田になぞ結つて白丈長を仰山に切放した樣子を見たら「何て

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

狂人見たいな」と云つて笑ふだらう。さう思ふと自分ながら氣恥かしくて、もう一層止めにしやうとも思つたが、どうでも一度結つて見ないでこの儘には濟まされないやうな氣がしてパラミノやかもじを買ひにやつた。

「お孃様は十もお若くおなりなすつた」と毛筋立を幾本も〳〵矢の様にたぼにさし込だ髮結が油手を假に手ふき紙で拭いて、まづ一服と長火鉢の傍ににじり寄りながら襷掛のまゝ感心して後に突立つてる下女と聲を合はせて云つた時、其語の中に含まれる皮肉を針のやうに銳く感じた。

眞實十も若い娘の結ふ髮に相違ないものを、二十七と云ふすがれの女が……。合せ鏡を渡して呉れた時、流石に耳が熱くなつた。

髮結のお留は腕が利いて居るので、長い間ヤケに引詰めて置いた髮もフックリと毛が立つて、赤くパリ〳〵になつて居た毛も思つたよりしなやかに艶よく落付いて居る。

「まあよく出來てねェ、」寄つてたかつて妹達が頭髮を見上げながら羨しさうに繰り返して云ふ語がやがて、

「嫌ねェ、姉様は！一生島田になんか結ひはしない、あんな重い物を喜んで頭へのつけてどこが嬉しいんだらう、薄毛の者は一度で根を取つた眞中が禿げて仕舞ふなんて云つてを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

きながら、自分から先きに結ふなんて……」斯う延びて來はしまいかと、髮結や女中等の手前ヒヤ〳〵した。琴や茶の湯を自分の道樂として稽古する傍ら自分の出た縁で築地の女學校へ一週に三度宛英語を敎へに行く外、是ぞと云つて家の用一つせず、縫物と云つても精々自分のもの……それも手まめな母が、解きほぐし、洗ひ張、裏は彼、袖口は是と、小學校に行く生徒がお裁縫の支度をして貰ふやうにお膳立をして貰ひつけて居たので、自分一人でする積りの物となると、幾度も長い緣側を駈けぬけて母の居間に一々聞きたゞしに行かねば捗のあかぬ事などもあつた。

指先に煩さく絡まる紅絹の袖裏を漸と付け終つて先づ之で綿を入れる斗りとホッと一息すると急に今朝來た手紙がまだ其まゝにしてあつた事を思ひ出してそれを疊みつける間ももどかしく机の抽出しを搔き搜した。表に控えて名前こそかいてなかつたがたしかに其人からのである事は、いつも使ひ馴れてる石竹色の小形な封筒と、奇麗な字で細く鮮かに認めた手風とが明らかに語つて居た。

「どんな事が此手紙の中に書いてあるだらうか」あるいは子供が開ける迄を樂しみにするガラ〳〵玩具のやうに、早く中を見たいやうな又見て仕舞ふのは惜しいやうな氣がして、容易に封を切る氣にはなれなかつた。子供が紅と白を食ひあはせた貝殼のとびらを一度放

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して仕舞ふと、其中味を見きわめる迄を樂しみにする期待の情がガラリとさめてほうり出して仕舞ふやうに疲れたやうなガッカリした氣持になる。

今朝早く、郵便箱へ新聞を取りに行つた時、運よく誰にも知られず、この手紙が安全に自分の掌に落ちたのであつた。是が人目を忍ぶ戀路でも何でもなくてさへ傍の見る眼の思はくが妙に氣を引かせた。

「何とかいてあるかしら、嘸甘たるい文句で埋まつて居ることだらう、」

「ハイ御手紙」と知らず貌に渡してをいて、封を切つて讀み下す自分の目元をじいつとすかすやうに見すえる小母のくすぐつたい貌、此樣な場合は又殊更見ないで放つて置くもをかしなものだし、態と、すまして讀み終つて懷に押し込むと、

「何か面白いことでもかいてあるかえ、」茶の間の隅で傍目も外らさず自分の縫物を急ぎながら、どこを風が吹くと云ふ調子に白つぱくれてあしがらをすくふやうな其小憎らしさつたらない。

あるいは手紙を掌の上にのせてじつと考え込んだ。此手紙を今こゝてムザ／＼封を割いて仕舞ふのは勿體ない、美しく甘い未來の空想を抱きながら是をよむには明るい月夜の晩薔薇の花園の中かなにかてなくては折角の樂しい興が損なはれて仕舞ひそうに思へた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

薔薇の花園の中かなにかでなくては折角の樂しい興が[illegible]あるいは時折よみふける英詩を見るやうな光景を空に畫いて自分を其女主人公に想像して見た。

膝の前に丸めて投げつけてあるお納戸地へ矢はず飛白を顯はしたお召の着物——今迄決して身につけたこともないやうな派手な——が空想から落ちた眼に止ると、もう是を着る時分にはミスの純粹な冠をぬいで小堀の家に人の妻となつて居るのだと思ふと、不思議なやうな、笑ひたいやうな感じが胸に迫つた。生涯に二度とない處女の春も愈々終りを告げるのかしらと考へると、流石に今更生れて二十余年來育てられて來た此家が懷かしくもあり尚かつ決して二度とは戻られぬ、一人身の輕い氣持から斯う慌たゞしく離れともなかつた。

——全く思ひ掛けぬとも云へやう、熊と質味な鼠縞のくすんだ好みにすねて、一生斯うしてあることゝ覺悟もし、意味もない器械的な英語の教師と云ふ、職に甘んじて、父母のない後は兄や妹の厄介に懸らぬやう我と我身を少さく狹く守るもくろみてあつたものを。——

「貴女の許のお姉樣は獨身主義で入らつしやると伺つて居ましたのに、今度お嫁付きなさるのですつて？」眞面目か冷かしかこんな事を私に云ふ學校友達があると妹が昨夜話した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

煩さい事だとは思つたが、どうて人は何とでも勝手に云ふがいゝ、二ノ町の賣れ殘りとも、高慢チキとも！　あるいはたゆたひながら封を切つて讀み出すと、いつものお淨書したかと思はれる程鮮明な細字で正しく書き連ねたいつもの手跡とは違つて、慌たゞしいペンの走り書が横さまに流れてそれもあるいには縁の遠い獨逸語で認めて有つた。いつぞや兄から少し斗り教へられたと話をしたことをおぼえて居てか。

「もう忘れて仕舞つたかと思つて！　馬鹿にして居るぢやないか！」

全く戲談ごとのやうに思つて端から拾ひ讀みに目を通して行くと一つ二つの字はどうやら斯うやら解けても、惡筆を讀み通すには中々容易でない。

あるいは、辛うして、略(あら)ましながら「私の子供は死んだ！　私の只た一人の哀(かな)しい子供は世を去つた！　父母の何處にあるかをも知らぬ痛ましい幼兒は三日のはげしい苦痛で世をのがれたと云ふ、――」　此樣な文字が餘程骨を折つた後で僅かに會得された。あるいは之丈け讀んで來ると、もう其先は別に讀み出す必要も感じなかつた。

手紙を手に持つたまゝ暫時は恍惚して、漸く西に落ち行く日脚のかげりゆく跡を　寒い障子の蔭にじつと見詰めて「あの兒！　あの兒！」とひとり其名を胸の中に繰返した。

其人の現在の生みの親にさへ包める秘密の鍵！　四歳(よつつ)て死んだ、女の兒、父がふとした機

みのあやまちから罪の犠牲となつて生れて來た子は遂に罪を亡ぼして永劫の榮ある天國の空に其いたいけな魂を走らした。其母親に似て生れながら美しいみめかたちを備へて居たと云ふ兒、あるいの胸の中が全て詩の一節にでもありさうな悲痛な現實の物語てかき亂された——其混亂の中から一筋、自分にも解せられぬ不思議な歡喜の微笑が心底から胸を突いて唇に上つて來た。止めようとしても止まらぬ不思議な微笑は到底打消す事が出來なかつた。其が自覺しない衷心の歡喜の兆てあらうか？唯々心がフウハリと輕くなつて、誰の貌を見ても笑ひたくつて堪らなくなつた。

——曉近き頃、孤燈の下にて之を記す、鹽の湯の宿、——とかきそへてある處をもう一度繰返して、其人の旅路に思ひがけぬ愛兒の死を聞いて其死目にさへ遭へなかつた悲歎に心を萎(なや)し、悄然と暗然たる貌をほの暗い點火にそむけつゝその手紙をかいた有様が目に見えるやうで、氣の毒なやうな、可笑しいやうな、愉快なやうな、とりとめられぬ感じのわだかまりが冷たい笑となつて、口元が自(おの)づと解けてヒク／＼神經的にふるえた。

あの臉には涙が光つて居たらう、力なく柱に背をもたせかけて、見るも氣の毒なやうな嘆息と共に過古の苦しい追憶を辿る姿、あるいには總て氣味よく心地よかつた。

「お前は何と云ふ可恐ろしい女だ！」殘忍無情！　自分から強いて聲を荒らげて斯うも叱

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて見たが、何物にもひるまず、不思議な微笑は矢張り、冷然と唇邊に淀んで居た。追へども遁へども退かぬ魔の影のやうに、何かしら人殺してもした跡のやうにサバ〳〵した氣持もした。

自ら知らず罪の魂りとなつて生れて來た薄命な子を膝の下に引敷いて鋭どい刄物かなぞで其かよわげな胸元を一思ひにグザと突き差したかのやうな感じがした。

其癖、其秘密を其人の口から聞かされた時、憎いとも、忌々しいとも其樣な嫌惡の情は露更浮ばなかつた。

若氣の炎えたつた情から、去る若い男と女が落ち入つた罪の淵、餘儀なく行つた罪の跡をいとほしいとこそ思へ、憎む心なぞは決してなかつた。

「いはゞ私なぞは社會上の罪人なんてす、私の斯うした胸の古疵の跡を示したら、貴女なんかは側へ寄付もなさらないでせう、貴女の阿父樣や阿母樣が幸に私を信用して下すつて、可愛い〻娘樣を安心して私のやうな汚れた人間に托さうとしなさるのです、世間の親心つて斯うしたものでせう、宅の兩親だつてうちの伜は未だに夜遊び一つしたことのない品行方正の男子だと心得てるのですから」斯う云はれて見ると意地づくでも跡へ引く氣が出なかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「では今に私でも參るやうになりましたら、其お子樣を是非ともお引取りして面倒を見て上げる事にしませう、」

おるいが斯う雜作なく云ひ放つた詞は其場合はせの咏でも體裁でもなかつた。女の子だから紅入友禪の派手な袈布でも着せて、眞白なエプロンを背中で十字に操らして、鉢巻リボンの淡紅色も可愛からう、かうして着飾らした人形のやうな子供の手を引いて、春先は人の出さかる江戸川の川ぶちを落花の吹雪を浴びながら「母樣」と呼ばれて歩いたら！暖かい母親の情も知らずに、天主教の學舍に孤兒同然に引取られて居た、いとしい子の爲、毎夜枕につく折は眞心こめて暖かい祈りもさゝげてやりませう、其生みの母親になり替つて、其ふびんな子の爲、只此世に一人の母になつてやりませう。

心底其時は斯う殊勝な氣持になれて、

「それは世間では、成程そんな風なことは一般社會では罪惡とも申しませうね、けれども私はさうと許りは取りたくありませんの、」

小說で見た復活の主人公が一少婦を姦した一場の光景を思ひ起して人間が自然に賦與せられて居る或る怖ろしい力に推され行く悲慘さを思ひやりつゝ、自分の仇敵ともなるべき女の影が其人の心に食み付いて居ることも忘れ、又外に其人がどんな女と不眞面目なまね

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をしたかもうたがはず、全く馬鹿々々しい位同情したものであつた。

小日向臺の日當りのいゝ二階の書齋で隣りに當る寺の和尙が手づさみに飼ふ籠の鶯ののどかな聲を聞きながら春らしい氣分でおぼろに其女の影も胸に畫いて見た。さうかと思ふと、其薄命な女の子が大きくなつて、尼になつて、畫で見るやうな純白の帽子に黒の裾長な服をつけて、重々しい念珠と十字架を腰に下げた淸らかに貴い姿となる處も想像して見もした。此世の中のどんな辛い事にも打堪へて來た事を示す、その浮世ばなれのした氣高い姿をなつかしみつゝあるいは二十何年もの後の事を考へて居るのであつた。

けれども今斯うしてじつとして居ると、どつかの果にまだ其母親と云ふ人が生きて居て、父なる人と同じやうに一人の愛子が永遠の暗に歸したことを嘆いて居るかもしれない。人の妻となつてか、ならずか、苦痛の追憶は痛ましくやつれはてた女の影を薄くして身も絶えよとばかり深夜の枕に涙をしぼつて伏ししづみ居ることとてがなあらう。

罪！　罪の價、罪の報い、――は安らかに引とられて行つた。たゞ其にがい悲哀を知る兩親の胸にのみ永劫の傷手を刻んで、夢のやうに何にも知らぬ子は春の光りに消え去つた。

いつか邊りが見えなくなつて居るのに氣が付くと、妹が籠洋燈をもつて後ろに立つて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「姉樣はまあ、何をそこに呆然考えてるの、臺所で忙しくつて竹がまご〳〵して居るものだから例によつて又小母樣のお冠が曲つて閉口しちまつてるのよ、」

そゝくれた前髮の毛をうるさゝうに指て耳の傍へはさんて、せはしなさうな樣子をしながら、矢張、眞赤にのぼせた頰をうつむけて立腰をしながら、推やつてある着物の柄のよさを羨やましさうに取上げてひねつて見て居る。

「必度是姉樣に似合ふわ、こんなのに黑い半襟でもかけたらどんなにか意氣に見えるでせうねエ」、

意氣好な妹はすぐに此樣な事を云ふ。おるいは全く呑氣な人達だと思ひながら膝から辷り落ちてた文殼を氣づかれぬやうにそつと帶の間へをし込んて針箱を片付けながら　もうつい今の事はカラリと搔きほぐされて了つて、あしたあたりはあの人も旅から歸つて來よう歸つたら必度こゝへ來るだらう。私のこんな髷を見たら、何と云ふだらう、一目見て欲しい、馬鹿な十八九の娘ぢやあるまいしと叱るだらうかどうか、それまで此髮がうまくもてばよい。ともすれば後へ引たをされさうになる重い髷を氣にしい〳〵臺所へ下りて行つた。そこらをガチ〳〵働く間も其人のもとへ嫁いて行つてその人の食物ごしらへや何かに狹い臺所を切りまはす心持て妻と云ふ名が珍らしかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

けれども心の底には何がなしに大きな戰爭に打かつたあとのやうな嬉しさが躍つて居て、瘦せた女のしとゞ嘆く姿と男のみじめに沈んだ樣子とが、目の底にいつまでも消えずにしみついて居る。何かしらはなればなれになつてる二人の大事な運命を眞中に立つて自分一人が握つて居るかのやうな氣持がして限りない强味を覺えた。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

冴え返る

白雨

冴え返る夜を逃げし鳩物おぢし

別時句なく病軀を梅に歸る友

化されし逸事も夜寒秘めごとや

とがめしを癒えし効說く梅の溫泉や

訪へば餘寒尙眼疾と盧に籠る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

吸入も療治や風邪に一家族

堆き砂吹き散りし洲や群千鳥

教子の首尾餘寒を咳きつ問ひやれば

鳩の巢を作る日うらゝ人の來て

君が口癖第一印象もふじ川春の會

春を會す同社の友の寄せ書きて

森ヶ崎の夜や世界觀も酢牡蠣ありて

枯草

岩野清

『今日は買物があるんですからお出掛けなさらないで下さい。』

晝飯の後仕末をしながら、又しても出掛やうとする良人の様子を見た小夜子は、犴走つた聲でかういつた。

長年ゐた婆やが病氣で暇をとつて歸つてから、もう一と月になる。

十一月の末で、朝々の霜が、目に立つやうに白くなつた。冷たい鎖をたぐつて、毎朝湯殿に、一丈もある深い井戸から、百餘杯も汲み込んだり、廣い庭の掃除から、座敷や椽側の雑巾がけは、さういふことを仕付けない小夜子にとつては苦しい勞働であつた。

『お姫様の手のやうだ。』と友達にもいはれ、自分も心窃かに誇りにしてゐた細く白い手も、此頃では、松の皮のやうにざら／＼してひゞだらけになつた。風の吹く日など、皮膚がこわばつてばり／＼とひゞわれる間から血がにじみ出してゐる

『なんと云ふみじめな様だらう。』小夜子は自分で自分を哀れむやうな心持になつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

都會から遠く離れた古い町、その町に近く田を埋め立てゝ新たに開いた住宅向きの一廓が出來た。その新市街には、會社員、實業家、官吏、さういふ都會の雜沓を厭ふ人達が多く住んでゐた。小夜子の家もその一廓のうちにあつた。

で、日用品は、五六町先きの古い町まで出なければならなかつた。

下女がゐなくなつてからと云ふもの、留守居のないのに家を明けて出ることは、良人からきびしく止められてゐるので良人が夕方勤めから歸るのを待ちかねて、買物に出るやうにしてゐた。

今日は良人が珍らしく朝から書齋に坐つてゐたので、明るい中に留守をたのんで、此間からためてある買物に出やうと、急いで臺所を片付てゐたのである。

『四時には歸る。』から投げるやうに言ひすてゝ、小夜子がまだ何か云はうとする時には、もう良人の姿は門の中にはなかつた。

『また玉突だらう。手のない私の忙しさを思つて下すつたら、せめてお休みの日だけでも一時間やそこら留守番をして下すつてもいゝのに、あんまり思ひやりがなさすぎる。』と小夜子は、がたぴしと荒々しく出ていつた良人の後姿を恨めしくも思つた。

常々から、近所隣りに名染もない淋しい移住者の心細さを慰めてもくれない良人のすげ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ないもてなしを思はないではゐられなかつた。

拭きかけてゐた茶碗小皿などを戸棚にしまひながら、其茶碗も、自分の體も、井戸ばたの三和土に投げつけたいやうにいら／＼した。

『どうでも勝手になさるがいゝわ。』と小夜子は心の中で叫んだ。

ぬれた板の間をふいたり、茶の間を片付けたりして、それでも四時を心待ちしてゐた。

然し良人は五時がなつても歸つて來なかつた。暮れやすい冬の日は、もう暗くなつてゐた。

所在なさに小夜子は鏡台の前に座つた。灰や埃で白くなつた丸髷、瞼の落ちくぼんだ目、艶も赤味もない鉛の様な皮膚がうつつた。

『これが私の顔かしら、丸でヒステリー病者だ。』かう思ふと、小夜子は、此頃の自分の心の淋しさを考へないわけにはいかなかつた。

老いた父を殘し、住みなれた東京を去つて來たのは何のため、舊い道徳に囚はれた世間の人々から受ける嘲笑を、——人にかくれて泣きながらも——心強く忍んで來たのも何のため、只誠心のあるやさしい慰めを得たいからではないか。もゆるやうな愛の熱にあたゝめられてゐたいからではないか。それに近頃の良人の態度の冷淡なこと、暇さへあれば、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

玉突にうつゝをぬかして、夜十一時十二時てなければ家の敷居をまたがない。たまに月の好い晩など散歩をすゝめても、ほんの義理一遍のお付合と云ふやうに、驅けるやうにしてどん〳〵先へいつてしまふ。家にゐても落付て一時間と話しあつた事もない。かうした枯草のやうなうるほひのない生活が、私の目の肉をそぎ、頬の赤味もからしてしまつたのだ、と小夜子は、今宵も玉突きで樂しさうに高笑ひしてゐる良人の聲を想像して、自分のいら〳〵してゐる氣も知らないやうなのが、いつそ憎くも思はれた。

七時も過ぎてから、せか〳〵した足どりの雪履の音がして、口を一文字に結んだ良人の顔があらはれた時、小夜子は、わざと出迎もせず鏡台の側にすわつたまゝてゐた。

『又か。』と小夜子の不機嫌な樣子をみた良人は心で思つて、ちよつと聞えるやうに舌打をして、帽子と外套を小夜子の後の方に手あらくほうり出した。

それでも小夜子はみむきもしないてゐるので、渠は用意してある夕飯の膳の前に無言で坐つた。

小夜子も、おしだまつたまゝ、お鉢を引よせてお給仕をした。

渠がむしやくしやするときにいつてもする癖て、茶碗を膳に置いた儘、左の手は懐にいれて右の手の箸でまず〳〵さうに口へはこんだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『一體、何が氣にくわないで、さうぶす〳〵してゐるんだ。』

渠は三杯目を終つた時、わざと下を向いて目を見合せないやうにしてゐる小夜子を、苦々しさうに見て高聲てかういつた。

『…………………』

怒つた時に限つて、執拗に沈默してしまふ妻の苦い顏を見ると、渠は不快でたまらなくなつた。小夜子が來てから。夜も一晩だつて明けた事はない。茶屋小屋這入りもふつつり止めた自分の心中立てを知つてゐながら、まだ不足らしい仕打が、打すゑてもやりたい程腹が立つ。

『どうせ貧乏で今の處思ふやうに物見遊山もさせられない。それだから元氣のないむつつりした顏ばかりしてゐるのだらうが、おれにはこれ以上働けないんだ。それが不足なら別れるより仕方がない。』

世間の女房達よりは、尊敬もし、可愛がつてもゐる自分の心が了解出來ないやうな女なら、どうでも勝手にするがいゝと云ふ心持ちで渠はかういつた。

小夜子は又小夜子で、私の不機嫌はそんな物質の不滿足ではない。たとへ下女の樣に、ひどあかぎれに手足があれやうが、米の一升買ひをするやうな貧乏をしようが、そんな事

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はなんでもない。只、一日中、猫の子一匹ゐない程の淋しい家の中に閉ぢ籠つてゐる、賴りない異郷住ひの心細さを察してくれたら、せめて、暇のある時は、夫婦らしい同情のある言葉でもかけてくれてもよさゝうなもの、良人の價値を信じてゐればこそ、かうして世間を敵として忍んでゐるのに、物見遊山に行かれないから、不足らしい不機嫌な顏をしてゐるのだなどゝ、淺はかな邪推をされるのがつらくも口惜しくもなつた。

『わたくしは、貧乏位で不足顏するのぢやありません。心から愛情をもつて向つてくれる人なら、土方でも車力でも、私は滿足してゐます。あなたと一緒になつてから、もう二年近くなりますが、只の一度だつて「淋しかつたらう」とも、云はれた事はないのです。』

堰きとめた水を、一度に開いたやうに、今迄啞のやうに沈默してゐた小夜子は、一いきにかう吐き出した。

『おれだつて、毎日仕事をしにいつてゐるのだ。さうして疲れきつて歸つて來るのだ。家のものゝ御機嫌までとる餘裕はない。』

『それは、疲れてもいらつしやるでせう。その位なら。少しは落付て、家のものと話してもすつたらいゝぢやありませんか。』物を見て來たつて、話してきかせてくれるんではなし、ほんに優しみのない人だと腹で思ふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『疲れてゐるから遊びにゆくんだ。家にゐたつて、どうせ二人きりぢやあ話のたねもないぢやあないか。』

『そりやあ、遊びにいらしやるもようござんす。けれど毎晩四時間も五時間も遊びに費やす時間があるなら、其内の一時間なりと家のもの丶ために話してもして、一日獨りぽつちでゐる私を慰めて下すつたつて――。』

『おれは家庭の犧牲になつて、家にばかりこびりついてはゐられないんだ。そんな平凡な人間にはなりたくないんだ。』

『そんなら私はどうすればいゝんです。朝から寢るまで話相手もなく、獸のやうに、只食べさしてもらつてさへゐれば、それて滿足してゐなければならないのですか。夜寢る時か食事の時よりほか、家を外にして、慰めの言葉一つ與へてもらへないやうな、淋しい生活に甘んじてにこ〳〵してゐなければならないのですか。』

『家へかへつて來たつて、むッつりした顏ばかり見せられちや、ついつまらないから長遊びする樣にもなるさ。』

『だつて、箸を置くか置かない中に、逃げるやうにしてお出けなさる姿をみると、又か、と思つて、心では笑顏をしてみやうと思つても、あゝまで家にゐたくないのかと、泣きた

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いやうに、胸が一つぱいになるんですもの、今日だつてさうです。さのふから買物がたまつてゐるのはお話してあるのに、承知していらつしやりながら、矢張り四時には歸つていらつしやらなかつた。』

『歸つてくるつもりぢやあゐたんだ。然し出掛けにいつた言葉を考へると、「歸つて來て頂戴ね」とでもいふなら可愛らしいが、疳走つたヒステリックの聲て、つんけんと云はれたと思ふと、意地になつて、わざと遲く歸つてやれと云ふ氣になつたんだ。』

若い女なら、若い女らしく、甘つたれるやうな調子てでも云ふのなら、却て可愛らしくていゝのに。と良人は思ふのだ。

『私には、そんな、醜業婦のやうな甘つたれた口はきけないのです。』

小夜子は、かういつて、再び口を閉ぢてしまつた。どうせ男には、女の心持ちはわからないんだ。女の望んでゐる温かい愛情、それを度外にして、只、肉の滿足を與へたり、生活の保證をしてやりさへすれば充分だと思つてゐるらしい。女はそれては滿足てきないのが分らないのだ。然しいくらそれを話しても、良人の一歩も讓らないやうな態度をみると、もう、くどく、くり返す氣にはなれなかつた。

『どちらかの思想に同化してしまはない以上、こんな衝突はいつまでもたえないんだ。淋

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しい生活を續けなければならないのだ。』

話しあつたので、始めよりは、いくらか感情の靜まつた良人に引かへて、小夜子は夜中こんな自問自答をして、心をいら／＼さしてゐた。

――完――

神の己を愛する者のために備へ給ひしものは、目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心未だ念ざる者なり。

靈は萬事を究れ知り、また神の深事をも究れ知るなり。

――哥林多前書――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戯曲

闇の花

荒木郁

登場人物

澄子。令嬢　二十一歳

菅家。詩人（男爵）二十三歳

伊藤。詩人　二十四歳

お民。侍女　二十三歳

廣田。舞臺に現れぬ人

時と場所

現代、十二月三日の夜、一富豪令嬢の室

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

地味にしつとりと飾られた西洋間、フホーターエ四五、圓卓二、その一は中央にあつて水仙の花の枯れた鉢植が上つてゐる。一は片隅に間食の用意がしてある。机一、雜誌類及び赤い薔薇の花が挿されたグラス器がある。本箱一、大鏡一、ピアノ一、ストーブ一、＝これは最も主要なる器具である。＝マフヴツトの筆に成れる難船の繪畫が掛けられてゐる。地味な色のカーテンがかゝつてゐる二つの窓。通口は二つあつて、一は廊下へ、一は直ぐに庭から表門へ通ずるやうになつてゐる。

澄子。（靜な落着いた女。うつとり夢みるやうな眼と、締つた口元には、理解と熱情とが噛み合つてゐる。　地味な和服、机の前に立つて取片附てゐる。）今夜は寒いやうだね。

お民。（圓卓の上に間食の品々を運びながら）左樣でムいます。特別冷えますやうでムいます。冬になりましてから今夜のやうなことは始めてゞムいませう。

澄子。外は寒いだらうね。

お民。えゝもう霜柱でざく〳〵いたして居ります。

澄子。外へはもう出られないだらうね。

お民。左樣でムいます。それにもう大分遲うムいますから……

澄子。さう、それぢやね。何か飲物が欲しいけれど……

お民。お茶に致しませうか。コーヒーにでも。

澄子。いゝえ。今日は少しすることがあるから……ベルモットが欲しいのよ。

お民。ベルモットでムいますつて。

澄子。あゝ。持つて來て置いてお呉れな。

お民。畏まりました。

澄子。それから廣田さんはもうお歸りになつたらうね。

お民。いゝえ。あのお父樣の所で御酒でムいます。

澄子。お歸になりさうにもないかい。

お民。今夜はお泊りでムいませう。

澄子。今幾時なの。

お民。さあ……もう十時少し廻りましてムいませう。

澄子。ぢやあね民。此部屋に被來る筈はあるまいと思ふけれど萬一もそんなことがあつてはならないからね、私今夜は少し仕事があるのだからいくら燈火を消さないでゐても、もう誰にもお眼にはかゝらないからね。

お民。畏まいりましてムいます。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

澄子。（室のなかをうろ〳〵しながら中央の圖卓の前に近づく）まあ水仙が枯れてゐる。何時の間にこんなに萎びて了つたのだらう。ちつとも知らなかつた。

お民退場。

お民、ベルモシトを持つて登場。

澄子。水仙の花が枯れたよ。

お民。まあ左樣でムいまして。今朝程お掃除を致す時迄は確り致して居りましたのに。

澄子。さうかい。困るね、此花が枯れちや。

お民。外に何か持つて參りませうか。

澄子。いゝえ。よろしい。けれど此花が枯れるなんて……緣喜でもないわ。

お民。まあ、今日に限つてお氣にお留めにならないでも　薔薇でも持つて參りませうか。

澄子。庭まで取りに行かなきやならないだらう。

お民。私、密と行つて參りませう。あのこの裏口の方から。

澄子。（周章て裏口へ行くドアの方に寄り）いゝえ。此所は今夜は開けない方が宜しい。若しか、冷めたい風でも這入るといけないから。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お民。左樣でムいますか。ぢや別に御用は。

澄子。あの今夜は書きものをしたいから、電氣も瓦斯も消さうと思ふの。それでね。ランプを持つて來て置いてお呉れな。小さい銀のランプをね。あゝそれから此の鉢を彼方へ持つて行つておくれ。眞個に氣味の悪い花だ。

お民退場。暫時して銀の小さいランプを持つて登場。

澄子。有難う。ぢやもう用事はないから寢ておくれ。……それから廣田さんはもうお寢みになつたらうね。

お民。只今ランプを取りに參りました時、お勝手の方で未だがたがたいたして居りましたから、大方まだお寢みにはなるまいかと存じます。

澄子。さうかい。兎も角今夜はもう誰にもお眼にはかゝらないからね。

お民。あのもしか……。

澄子。え!?

お民。えゝあの……お寢み遊せ。

お民退場。

澄子。男爵はお出でにはなるまい。此方からお呼びしないのだから（机の花器を圓卓の方に持ち出し、ランプを燈して、瓦斯及び電氣を消す。物待ち顔に室内を見廻して雜誌などを擴げる。二三分してから又

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

立上つて裏口へ通ふドアの傍により耳をすます。而して思ひ出したやうに帯の間から鍵を出して廊下に通ずるドアを音たてぬやうに開けて廊下を見廻し閉めて錠を下す。元の座に直つて卓上の薔薇の花をぢつと見入る。花瓣は風なきにはら〳〵と音もなく落ちる。)

あらつ。(卓上の瓣を指の先でつゝいて) 散つたわ。……風もないのに……風もないのに散つたわ。……あゝ。(花瓣を取り上げて接吻す)おまへのやうな美くしい花でも散る時には散るのだね。時が來たのなら元に戻す譯にはゆかないのだわ。(間)このちひぽけな美くしいおまへも、私たち人間と同しやうに、あがいたつて、もがいたつて時の力には勝てないのだわ。神様は種々な弄物を澤山持つて被在るのだ、そのお胸は奈何に廣いのだらう。自然の力、…… あゝ怖ろしい。(再び立上つてドアの傍に寄り耳をすます。冷たい風の音が聞える、いら〳〵して) 私は奈何して好いのか分らない。私のしてゐることは惡いことかしら……私にはちつともさうとは思へないのだけれど (食卓の方によりベルモットを飲む) 今夜はお酒といふものを始めて甘しいと思つた。(空を凝視て何か考へる容姿室内を歩き始む) 淋しい、淋しい。何て淋しい夜だらう。而してまあこの手の顫へること……(額の前に立止る)ほんとうにね、一人一人が生きて行かうと焦慮る力は恐ろしいものだ。難船に會つた時のこの顏、誰も誰も生きやうとしてゐる、我先に死ぬまいとしてゐる。いざとなるとかう迄しても生きたいものなのかしら……(ドアの方で微な音

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がする默つて近寄つて鍵を下す）

伊藤登場。大島紬の着物に同じ羽織。背は高い。油氣のない髪を分けてゐる。輪廓のはつきりした顏。先づ男らしい男とでも云ひたいやうな姿。けれど其態度は非常に初心なのである。その心は極く純なのである。

澄子。待つて居たのですわ。

伊藤。（あわたゞしく）何か事が起つたのですか。

澄子。しつ。靜に。誰にも見附かりはしなさらなくつて。

伊藤。えゝ。

澄子。門はあの鍵で直ぐに開いたでせう。

伊藤。門は開いてゐました。そつと押したら開きました。

澄子。開いてたのですつて……誰が遲く出たのかしら……て誰にも見つかりはしなかつたのでせうね。

伊藤。誰も私の來たことを知らないやうでした。人には遇いませんでしたから。

澄子。寒かつたでせう。でもまあよく來て下さつたわね。私眞個に嬉しい。あゝは申上げたけれど來て頂けないかとも思つてゐました。

伊藤。何か事が起つたのですか、男爵の上にでも。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

澄子。いゝえ晝間お出を願つても宜かつたのですけれど……悠然(ゆつくり)出來ないし、それに人が出たり入つたりしたら五月蠅いからわざ〳〵夜にしたのです。

伊藤。けれど全てかう泥棒か何かのやうな氣がしました。門を這入ると妙に足が引き釣つちやつてなか〳〵先へ進まないのです、一歩一歩に落着いて來ましたが　どうも、生れて始めて味つた氣分でした。かう身體中が顫へて手も足も固くなつて齒の根はがく〳〵しましてね。

澄子。貴方もねんねえね。

伊藤。だつて綱渡りぢやありませんか。そしてお用つていふのは。

澄子。まあさう急がないだつて宜いぢやありませんか。寒かつたでせう。ストーブの側に行つて何か飲みませう。而してお話しますわ。（食卓の品を支度する。）

伊藤。（ストーブの傍に寢椅子を向合に置く）寒い……

澄子。それぢや掛けませう。

伊藤。何だか變な氣がします。

澄子。變……（輕く笑ふ）寒かつたでせう。（間）私と貴方とは可成古いお交際ね。

伊藤。さうですな。男爵の紹介で劇場でおめにかゝつたのが始めてゞしたから……三年近く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にもなりますが。

澄子。その位でしたわね。貴方ね、その間私を奈何思つて被在つたの。

伊藤。奈何つて……別に。

澄子。斯うして二人限りで差向ひにお話したことは是迄一度もありませんでしたわね。

伊藤。さうです、いつも誰かと一緒でなければお伺ひは致しませんでしたから。

澄子。だから、お互の心を知る日はなかつたのですわ。

伊藤。まあさうです、けれども間接には男爵からいろ〳〵貴女のことは伺つてゐました。……御用つていふのは。

澄子。まあ。急かないでも宜いわ。之をお飲りなさいませな（ベルモットをつぐ）

伊藤。有難う。

澄子。貴方ね。私がこれから話すことを眞面目に聞く勇氣がおありでせうか。

伊藤。ええ……伺ひます。

澄子。而して私を蔑んだり見下したりしては厭ですよ。私は眞面目に話すのですから。

伊藤。いゝえ。そんなことは有りません。無論眞面目に聞きます。

澄子。ぢやね伊藤さん、濟みませんが鳥渡そのランプを少し細めて傘を被せて下さいませ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な。（伊藤立ちてランプの心を細め傘を被せて座に戻る、落着かぬ態度）有難う。（間）伊藤さん。私はね近い中に結婚をするのですの、近い中に。

伊藤。えつ。（烈く驚いてぐつたりする）何時頃です。

澄子。年の中に。

伊藤。あゝさうですか……お目出度う。

澄子。冷やかして被居やるのぢやないでせうね。

伊藤。（苦しさうに）まぢめです。

澄子。私……も少し、せめてもう一年でよいから娘といふ名てゐたいと思ひますわ。

伊藤。けれどその方が幸福でせう。奈何にか幸福でせう。男爵は乾度喜んでゐなさるに違ひない。

澄子。えつ。男爵……私は管家さんと結婚をするのぢやないのです。

伊藤。男爵とぢやないのですつて。

澄子。ぢやないのです。（獨白）けれど男爵だつて廣田さんだつて結句同じ譯なのだ。唯結婚なんていふ繩に縛りつけられたくないつていふのだから……あゝ伊藤さん。私は此頃何だか無上に淋しい哀しい氣持がしますの。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

伊藤。（故意らしく無雑作に）一歳末のせいでせう。歳の暮といふものはその名稱だけでも淋しい響がしますからね。

澄子。さういふ淋しさではないのですわ。もつと切迫詰つた苦しいやうな淋しさです。それて私は此頃生きてゐて甲斐のないやうに思へますの。例へば今迄受けて來た僅な幸福ね、さういつたものがこの先に又とあるか奈何か分らないでせう。今迄の二十一年といふ年月と今後來る何十年といふ年月と、少つとも變りはないのでせう。變つたところで五十歩百歩ですわ。今迄の方が若いといふだけ幾らか幸福も多いといふ譯ですわ。だから私考へると何だかもう堪へられなくなりますの。

伊藤。そんな事をいふものではありません。それぢや全で駄々子のやうぢやありませんか。假令貴女がどんな事情で結婚をなさるにした處、精神的に自分の對象であるといふものが現世に住んでゐるといふ幸福があればそれで宜いぢやありませんか。

澄子。さうね（間）さうすると萬一かそれで結婚するとするわ、その夫は大變に不幸な人になるわね。

伊藤。ですが止むを得ないでせう。

澄子。あゝそんな事は奈何でもよいのでしたわ。私に取つては今の場合餘り大問題でもな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いのだから……私今日お出を願つたのはね。……手紙御覽下さつたでせう。

伊藤。私に下さつたのですか。昨夜の手紙は、ぢや間違でも何でもなく慥に私に下さつたのでしたか。

澄子。厚かましいと思ひなさつたでせう。

伊藤。いゝえ。あの眞個なのですか。

澄子。私は極くまぢめにお打明けした譯なの、ねえ伊藤さん私は貴方を心から戀してゐるのです。愛してゐるのです。けれど私はもう自分自身の身體ぢやないのです。もう片足棺桶へ突込んだ半病人と同じやうに、もう私は身動の出來ない身體になつてゐるのですわ。

伊藤。（わな〳〵震へて小聲に）噫々

澄子。私眞個に貴方を戀してゐるのですわ。

伊藤。その語に幾人かの男は貴女の前にひれ伏したのぢやあるまいか。

澄子。えつ。何と仰有るの、あゝ貴方も矢張り世間の普通の方なのですわね、矢張り私の心意を知つて下さる方ぢやないのですわね、私は過日貴方の詩を拜見した時、あの柔しい眞面目な詩を書く貴方のお心にすつかり敬服して居たのですわ。それだの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に。

伊藤。（何か怖ろしいものに出會つた時のやうに周章て）あゝさうぢやない、さうぢやないのです。さう思つて居やしません、唯云つて了つたのです許して下さい。私には貴女のお心持が好く解つてゐます。

澄子。ほんとうに。

伊藤。嘘ではありません。

澄子。ぢや貴方、私に安心をさせて下さいませんか。弱い、小さい、蟲のやうな女に、花瓣のやうにもろい私に。

伊藤。私はどうしてよいのだか分らなくなりました。

澄子。私を愛しては貰へないでせうか。私を。

伊藤。愛します。

澄子。心から愛すと云つて下さい、私は自分だけ戀をして平氣でゐられる強い女ではありません。矢張り對手からも愛せられなくつてはねえ、伊藤さん私は弱いのですから。

伊藤。愛します。柔しい貴女の總てを愛します。

澄子。さう眞個。…… 實は……嗚呼……けれど私貴方の仰有つた通り慾ういふ言葉を幾度

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

經驗しましたらう。然ういふ淋しい戰へたやうな夜を幾度味ひましたらう。がいつも始めての日のやうにわく／＼するのです。此の手を、此の手を握つて下さい。靑く顫へてゐませう。

伊藤。（女の手を握り）おゝ此の顫へ。

澄子。貴方の爲めに顫へてゐるのです。

伊藤。私の爲めに……（澄子の顏を熱つと見詰めて細い手に接吻す。暫時二人共無言）

澄子。（不安さうに）何を考へて被居しやるの。

伊藤。『あゝ我が前に幸福の日は來れり。』

澄子。（默したまゝ男の顏を凝詰む。時計十二時を打つ、二三分してから）哀しい生命を私は澤山有つて生れたのですわね。

伊藤。哀しい生命。幸福でせう。貴女の仰有る哀しい生命は人間の花ではありますまいか。女の方のまぢめな生命ではありますまいか。それを現世の美くしい花だとは思ひなさいませんか。

澄子。私はね、過日男爵のお宅でね、貴方におめにかゝつて、貴方の詩を伺つた時、あの詩は私獨りの爲めに歌はれたのぢやあるまいかと思ひましたら、私は貴方が詩をお

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

讀みなさる時私は貴方の魂の上を影つて行く明るい光や暗い色迄瞭乎と見入つて居ました。そして其の美妙な光や小さなさゝやきのまに〳〵私の胸はどんなに高く波を打ちましたらう。……眞個に私の心はあの詩の中に全然歌はれてあつたのですわ。

伊藤。さうですか。私些とも知りませんでした。私さう仰有つて下さると何とお返事をしてよいか分りません。

澄子。男爵もよい詩を書く人ですわね、あの人の心は全然が詩なのですわね、けれど私此頃はあの夢を見て春の廣野に突き放されたやうな薄らした詩では滿足することが出來ないやうになつたのですわ。何か、かう絕えずしめ付けて呉れるものが無くては生きてゐられないやうな氣がします。

伊藤。男爵は好い詩を書く人です。私は天才だと思つてゐます。

澄子。さう、さうかも知れませんわね。吃度何かする人に違ありませんわ。

伊藤。で……男爵は貴女の結婚を御承知なのでせうね。

澄子。いゝえ、あの先刻鳥渡報せましたけれど……それは結婚のことではないのです。

伊藤。聞かれたら嘸かし驚くことでせう。何だか其姿が目に見えるやうです。管家君は何

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れ程まぢめてしたらう。眞にあゝいふ人は居ないと云つてもよい位てす。

澄子。さうてすわね。だからそれだけ反つて話がしよいと思ひますの、貴方だからお話致すやうなものてすが……私此頃氣が附いたことがありますの、それは私と男爵との戀はもう終をつげたのぢやあるまいかと思ひました……噫々私はそれを思ふ度に淋しいのてす、哀しいのですわ、けれど終をつげたのは事實なのてす。それはもう私達にはどうすることも出來ません。たゞ時の力がなした業てすものね。

伊藤。男爵もさう思つてお出でせうか。

澄子。いゝえ。あの方にはまだ脈があるのです。けれど貴方にはお解りになるでせう、戀といふものはもう五年も六年も續くものぢやないといふことは……あゝ時の力程怖ろしいものは有りませんわ。何と云つても、もう今日迄のやうな若い幸福な日は來ないのですからね。

ドアをたゝく音。

伊藤。しつ（ドアの方を指す）

澄子。（立上りて）誰……

お民。（室外にて）民でムいます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

澄子。（小聲にて伊藤に）男爵が見えたのかも知れません。
伊藤。奈何しませう。
澄子。平氣で居て下さい。
伊藤。（澄子と自分との椅子を離しておど〳〵してゐる）
澄子。（ドアの側に寄り小聲にて）何用なのかい。
お民。（室外にて）あの被來つたのですが、お會ひ遊ばして。
澄子。あゝ、困つたね。
お民。お斷り致しませうか。
澄子。いゝえ……よろしい、お通し申してお呉れな（伊藤に）構はないでせう。
伊藤。何なら私歸りませうか。
澄子。いゝえ。もう間がありません。

男爵管家登場。地味な洋服、髪は美くしく分けてゐる。色の白い美男子、四六時中落着かぬ態度は狹い額と二つの鋭い眼に現れてゐる。物事を聞くと同時に明瞭な解決をつけたがる狂熱的な所がある。而してそれを又、掩はうとして苦むといつたやうな複雜な性格である。

澄子。好く被來しやつたわね。
管家。入つてもよいですか。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

澄子。はい何卒。
伊藤。管家君。
管家。やあ……
三人共椅子に倚る。
澄子。(管家に)手紙着きまして。
管家。え、それで來たのです。
澄子。伊藤さんは私がお呼び致したの、來て頂いたのですわ。
管家。お世話様。迷惑ぢやなかつたの君。
伊藤。え、あのいゝえ。
管家。全體奈何したつていふのです、變つたことでも起つたのですか。
澄子。手紙に書いただけ、外に何もないのです。(獨言のやうに) 結婚と戀とは何の關係もないのだから。
管家。え、結婚……
澄子。はい、それは故意とお話しなかつたのですが私は近い中に結婚をしますの、それは私と貴方の間には何の交渉も無いのですから誤解なさると困ると思つてお報をしま

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

せんてしたの。

管家。結婚……（語尾の消えた力なき獨語、一時に湧きかへる心の波をわれと抑へてわざと冷靜に。）そいてお互の間にはもう元の愛を見出すことは出來ないてすか。

澄子。はい。結婚は別として、お互の間はもう元には戻りません。

管家。戻らない……噫々澄さん、私のこの淋しい聲を聞いて下さい。貴女の行つたあとは私はたつた獨になるのです。貴女の胸に私は無からうけれど、私の頭から足の先の慄までが貴女の一擧手一投足の爲めに動いてゐるのぢやありませんか。せめて私も澄さんのやうに倦くといふ時が來るなら、……あゝその時が來てもするならなあ。

澄子。何時かその日は來るてせう。たゞそれが遲いか早いかの違だけてす。

管家。恐ろしい、あゝ恐ろしい。時の力が何もかも攫つて行つて了ふのだなあ、私はたつた獨になるのだ。

澄子。さうね、だが獨は貴方許りぢやありますまい。

管家。それで貴女は淋しいとは思はないのですか。

澄子。淋しいと申上げたところてそれが何になりませう。どうせ獨りて生れて來て獨りて死ぬのが人間の規約ですわ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

管家。哀しい規約だ。……

澄子。けれどその途中〳〵に新らしい夢を造つて行かうぢやありませんか。お互にね。

管家。（悲しい笑）刹那の喜を……

澄子。それは永遠に續くものでせう。

管家。淋しいものだなあ。

澄子。自然の法則ですもの。

管家。自然の法則……あゝそれを私と貴女丈けで覆へすことは出來ないのか、せめて、貴女と私の二人丈けでも。

澄子。駄目ですわ。私に出來ないやうに貴方にも出來ません。

管家。そいで貴女は……

澄子。私は囚はれの身となります。今日迄のやうな若い自由な日はもう私の知らない國に旅立ちました。而して淋しい苦しい何かが私の前に現れたのです。けれどそれは、貴方に關係はないのです。

管家。僕等の戀に關係はない。それは分つてゐるたゞ貴女の終りの日が早かつたのを私は哀しんでゐるだけです。伊藤君、君は僕の親友だなあ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

伊藤。長い間の……

管家。僕を助けて呉れ。

伊藤。管家君。

管家。伊藤君。

二人とも顔を見合せて淋しい表情。

伊藤。（しつとりと、而も强く）僕は君よりもつと怖ろしいものに襲はれてゐます。誰れにも話すことの出來ないかなしさに。

管家。お互だ……

澄子。さ、二人で私を祝つて下さい、私は改めてお二人にお報せします。結婚をするといふことを……お二人とも喜んで下さることが出來ませう。

管家。私は貴女の幸福になることなら何でも祝します。

伊藤。私も。

澄子。私はね、實は此の家の娘ではなかつたのです。小さい時から此家に育てられたのださうです、それを母も父も話ては呉れませんてしたので私は生れた家同樣に我儘に幸福な日を送つてゐました。その我儘な報酬として今度は是非結婚をしなければな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らぬ一人の人が出て來ました、其人は是非此家を繼がねばならぬ人なのです。

管家。私は近しい澄さんの結婚を祝することが出來る。あゝ確に出來る(間)今夜は嬉しいことや哀しいことが一緒になつて……丁度私を愛してくれた、たつた一人の姉が嫁く日のやうだ。(淋しく笑ふ)

伊藤。管家君、仲好くしやうね、一緒に詩をうたはうてはないか。

管家。毎日〳〵笑つてうたはうよ。

伊藤。二人て……

管家。僕のかいた詩は曾澄さんがうたつて呉れた。……けれど、(言葉の調子稍々亂れる。顔色青くなる。)……時の力が……

伊藤。管家君、ベルモット飲まないか。(コツプに注ぐ)

管家。有難う。伊藤君。

伊藤。君は美くしい詩人だ。

管家。お互様だ。(笑ふ)

伊藤。唱はうよ。

管家。大きな聲で……君は僕の親友だなあ。

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

澄子。伊藤さん私の代りになつて下さいな。
管家。何の爲めに。
澄子。私の分も、貴方に對して親しく。
伊藤。私にそれが出來るか奈何だか……
管家。いや君は僕の親友だ……君つ、君達二人見て居給へ。僕は今詩を書くのだ……熱烈な香の迸ばしる詩を、而して君達二人にうたつて貰ふのだ、（間、息をつひた暴風雨の靜けさのやうな間）澄さん。（管家、つと走り寄つて、ストーブの赤い炎のなかに青白い手を突込む）見てくれ、詩を書くこの手を。（眼は怪しく光る、空しく何かを熱視て笑ふ聲は哀しく亂れてゐるけれど強く世界の果てても届くやうにしまつた聲。）

室外にて密とドアを叩く音す。

お民。お孃樣、お孃樣、大變でムいます……裏門が開いて居りましたので……

澄子、伊藤の兩人管家の急激な物狂はしさを見て周章てうろ／＼するドアの音烈しく。

お民。お孃樣、ともかくお開け下さいませ、旦那樣が御立腹でムいますから。
澄子。（お民の言葉には耳をかさず管家の手を押へ啜泣ながら）男爵、男爵、（男爵澄子の胸に倒れる）
お民。御孃樣、おあけ下さいせ。（ドアの音烈しく）
伊藤。管家君。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

澄子。縋りして、男爵。

——幕——

藝術家は意志の客觀化が芝居をするに見惚れ、それに停まつて少しも疲れずに眺め、それを描き出して再現し、而してその芝居を演する費用をも自分で辨ずる。即ち藝術家は自分自らが此の樣にして客觀となり、又不斷の惱みに住して居る意志そのものである。而して世界の本性を此く純潔に眞實に深く認識する事が、今度は其の人の目的になつて、この目的を離れない。それ故藝術家にとつては藝術は永久の解脫でなく、一生の或る時の安慰で、聖者の得脫と違つて藝術は意志を鎭靜して了はず、只そこに行く途中に暫し休息をする如きものである。

——ショッペンハウエル——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心象事實

内山楓葉氏の經驗

×

明治十八年の秋、空は快く晴れ渡つて、風はないが冷さの身にしむ夜であつた。まだ幼なかつた彼は例のやうに學課の復習を終つた後、母親と一緒に火鉢に手をかざしながら話してゐると、戸外に爽かな聲で、只一度彼の名を呼んだものがある。もう十一時を過ぎたのに友達の訪ねて來る筈もないと怪まれたけれど、灯を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

持つて戸外に出て見た。併し四邊は寂として人影さへ認められない。再三對へて見たが應ずる聲もなかつた。しかも呼んだ其聲は疑もなく當時は東京に赴いて居たが、曾ては最も親しかつた友達の聲其儘である上に、母親も同時に確に聞いたと云ふ。けれどももとより其友達の訪ねて來る道理もないので、甚だ疑念に堪へなかつた。ところが數日を經て其友の訃音に接した。

×

明治四十三年八月八日のことであつた。

彼が伊豆天城南麓の假寓に住んで居た頃、偶々所用があつて暗い中に起き、入口の戸を明けると、程なく要務を帯びた二人の男が這入つて來て、入口に近い所に座つた。彼は其所から約一間を隔てたる奥に事を辨じてゐると、二間ばかり向ふの入口の戸に添つて、一人の女がぢつと突立つてゐた。夜あけ方のことて、はつきりとその容貌は見極められなかつたが、髮を束髮にした中肉中脊の若い女が、白地の浴衣の裾を端折つて、右手に被笠を持つた旅姿てあつたことは朦朧とはし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てゐたが確かてあつた。彼は最初この像を見た後、約三分時して再び注視したが依然として像は同一の場所にあつた。て、使の男の連れだらうとは思つたが、あんまり押し無言つて棒立ちになつてゐるのを變に思つて、三たび見た時はもう全く姿は認められなかつた。男達に尋ねて見るとそんな女はちつとも知らない、私共の外には此所に誰も居なかつたと言ふやうな返事てあつた。この事があつてから數日の後茅ヶ崎南湖院に病を養つて居た彼の女友達が同じ月の十二日の午後一時に死んだと云ふ報知を受取つた。

×

明治四十年三月十四日の午後七時半。大雨に風さへ加はつて轉々物凄い夜てあつた。

彼が八年の間、一面に於ては同僚として、最も相信じ、相親んで居た友達の病氣が俄に革ると聞いたので、明日は湘南の病院に訪ねやうと其仕度などしてゐる最中、突然机上のランプが消えた。いくら戸外は風が強いと云つても、雨戸を閉

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最中、突然机上のランプが消えた。いくら戸外は風が强いと云つても、雨戸を閉ぢ、障子を立てた室内のことである、しかも心の足らないのでも、油の乏しいのでもないから奇異の念を禁じ得なかつた。ところが程なく訃を電報された。そして電文の時刻とランプの消えたとは殆ど同じであつた。

×

秋岡龜太郎氏經驗

攝津尼崎の秋岡家では惡漢の叔父の爲に平和であつた母子間に財產爭ひが持ち上つて、裁判沙汰は數年に亘つた。息子の龜太郎は大酒家の子なので、生來心身共に虛弱な、神經質な、正直なかはりに至つて小膽な男であつたから、母親が叔父に欺かれてのことゝは云へ實の母子が法廷で爭はねばならことの淺間しさや、世間に對する不面目や、裁判上の心勞などから終に烈しい神經衰弱症に陷つた。

明治三十四年の冬の宵であつた。彼は妻のお桂と養子と三人で例の通り茶の間

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の隣の部屋に寝て居た。うとうととしたかと思ふと茶の間の八角時計の下の柱のあたりから頭を切下げにした老婆が鼠小紋の着物をきて、すうつと此方へ歩いて來たが、やがて三人の頭の處に端座し、つくづくと見守つてゐる。變なこともあるものだと起き上つて、再び見直したが矢張りぢつとして動かない、容貌も、服裝もはつきりと見える、三度目に見た時はもうそのシーンは全く消えて何ものも認められなかつた。

其後龜太郎は不思議に堪へないので色々考へたがどうしても思ひ當らぬ。そんな老婆は曾て見たこともない。で、親戚の誰れ彼れに話して見たところが、曾祖母に相違ないと云ふ。曾祖母は龜太郎が生れた時はもう世を去つた後だつたから彼にとつては見知らぬ人なのは當然である。曾祖母はいつも八角時計の下の柱の處に座つてゐた。そして鼠小紋の着物は死ぬ前に着てゐたのである。容貌も彼の語る通りであつたと云つた。

て、龜太郎は始めて曾祖母の死後の魂が家庭の不和を心配してのあまり姿を現したのだと信ずるやうになつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其後秋岡夫婦は訴訟事件の苦しさから天滿宮の狂信徒となつた。

明治三十六年の八月十七日のことである。空は晴れて暑氣が强かつた。夫婦は晝食後いつものやうに何氣なく西枕に北向て晝寢してゐた。三十分あまりも眠つたかと思ふ頃、妻のお桂はふと目醒めた。店の時計を見ると、まだ二時前であつたから。今少しと又枕に頭を休めて、眼を閉ぢると、すぐ自分の膝もと、夫の枕頭のあたりに云ひやうもない氣高い、黑裝束の男神が、靴を穿いて兩足をきちんと揃へて、嚴かに立つた。あれ不思議と思はず眼を開いて四邊を見廻したら、もう何も見えなかつた。夫はすや〳〵と眠つて何事も知らないらしい。表の方は眞夏の日がかん〳〵と照つて目眩いばかり誰一人來たらしい形跡もない。

で、「旦那々々」と夫を搖り起さうとすると、其途端に格子が明いて、

「今日は天滿宮からの御使ひですが……」と聲がかゝつた。

「確にさうだ、私は今天神樣を見たのだ。旦那の枕頭に立たれたのは屹度旦那を守つて下さるのだ。天滿宮の御使ひよりも一足さきに天神樣が御自身で御出下さつ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのだ。」とかうお桂は解してゐる、信じてゐる。
それは今度持出された裁判が自分に不利なのを知つて龜太郎は余程信心せねばならぬと其日の朝早く天滿宮へ參詣して、例になくお湯を上げて其儘歸つて來たのでそのお湯に對するお菓子を今天滿宮から持つて來てくれたのである。
この事があつて以來、むづかしかつた裁判も忽ちこの方の勝となり、しかも其申渡は二十五日であつた。二十五日は天神樣の御命日である。

──らいてう記──

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

赤い死の假面

ポオ

「赤い死」は永らく國を荒らした。どれ程烈しい惡疫だつて、此樣に致命的な怖ろしいものはない。血――赤い血の恐怖はその化身であり、且又確證であつた。烈しい苦痛や不意に襲ひ來る眩暈に續いて體中の毛孔から流出する多量の出血と共に死んで仕舞ふのである。罹災者の身體や特に顏面に顯はれる深紅の斑點は此惡疫の特徵で、もう斯うなつてはどんな人の同情も救助も何の役にも立たない。一度此疾病に憑かれたとなると其進行は目ざましいもので、僅か半時間位で譯なく終りを告げて仕舞ふのである。

然し、プロスペロ公は根が大膽で、聰明な上に幸福な人であつた。其配下の人民が半ば絕滅して仕舞つた時、彼はナイトや多くの廷臣の夫人達の中から氣輕で、確りした人達を側近く召出して、其人達と一緖に城櫓への僧院の一なる懸け隔つた幽居に引籠つた。僧院は公自身の並外れた、しかも嚴正な趣味によつて造り出された宏大華美の建築で有つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

堅固な丈高い障壁に取圍まれて居る。障壁には幾つかの鐵門が有つた。廷臣共は火爐と大槌とを持つて來て門をピッタリ密着させて仕舞つた。人々は固く心に決して絶望や亂心から突差に起る衝動で出たり入つたりする事の出來ぬやう見事仕遂げて仕舞つた。僧院には充分糧食の備へが有つた。此樣な用意をして廷臣共は疾病の傳染に抵抗する事に務めた。斯くして全くの別天地が築かれた。意味もなく此樣な月日を繰返す內、次第に悲しむ事にも、物を思ふ事にも疎くなつて來た。公は徒然を慰める爲にあらゆる歡樂の手段を講した。幇間もあれば即興詩人もあれば、所作事師も音樂家も美人も――酒も有つた。たゞ世間に、はびこつて居る『赤い死』を除いては？何も彼も悉く安全であつた。

プロスペロ公が非常なる華麗を極めた假面舞蹈會に一千の客を招待されたのは惡疫が最盛んに狂奔した頃で、幽居の五月目か六月目の末つかたに向つて居た。

其假裝會は非常な逸樂的な觀物で有つた。然し、先づ最初、それの催された部屋部屋の光景に付て一言陳べさせて貰ひたい。そこには七人の――正裝した從者が控へて居た。尤も多くの宮殿では斯樣な從者は長い眞先な列を作つてゐるのだが、しかも何等の目を遮るものなく其光景が悉く見渡される程折戶が殆んど壁に着くまで一ぱいに左右に開かれて居るのだ。が、此場合は奇怪を好む公の趣味から創出された事とて著しく異なつて居た。部屋は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一時に一よりは餘計に見えないやうに不規則に排列せられて有つた。二十ヤードか三十ヤードの處にキックリと曲つた角があつて、それにも珍奇な趣向が施して有つた。右にも左にもどの壁の眞中にも細長いゴチック式の窓が、從者の列の蜿々として續く廻廊を覗いて居た。是等の窓は燒付ガラスで作られてゐて、其種々な色は各の窓が內に向つて開いてゐる其部屋々々の流行色の裝飾といづれもよく調和を保つて居た。例へば一番東の果の室には藍色で飾付けられてゐた――そしてその窓はといへば冴え切つた藍色で有つた。二番目の室は帷帳も裝飾も悉皆紫で窓ガラスも亦同じ色で有つた。三番目のは室中徧く綠で、窓の扉迄も餘さなかつた。四番目のは明るいオレンヂ色で總てが備へ付けて有つた――五番目は白、――六番目は黃色で、第七番目の室は黑ビロードの帷幄で天井から壁を密に押包み其重いヒダが矢張同質同色の敷物で敷きつめれた床の上に浪打つて居る。然し、此部屋の窓ガラスの色ばかりは邊りの裝飾と一致を欠いて居た。此處の窓ガラスは眞紅――濃い血色で有つた。扨之等七つの部屋の一つにも洋燈若しくは蠟燭の火影のまたゝきだに無かつた。奢侈な黃金づくめの裝飾があちこちに施してあつたり、或は屋根から吊り下げられたりして居るものもあるのに。室々に詰めて居る從者の間にも洋燈或は蠟燭から發する光のそれらしい影さへ無かつた。けれども從者の立並んでゐる廊下にはカッカと火の起つた重

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い三脚火鉢が窓に向つて据えて有る。其光りが色付けガラスを通して部屋々々をクッキリと明るく照すので、數多の派手な奇怪な外觀を呈して居た。然しながら西の方の、即ち黒い室は血色に燒き付けられた窓ガラスを通して暗色の帷幄の上を流れる火影のために極端に幽靈染みて居る上に、其境に足を踏み入れるに充分な勇氣を持つた僅二三の人達の容顏をもさも狂氣染みたものに見せて居た。

尙、此部屋の西の壁に對して黒檀の巨大な時計が立つて居た。其振子はあちらこちらに鈍く、單調な響に伴なつて搖れて居た。長針が表面をグルリと廻つて時が正に報じられやうとした時、其の眞鍮の肺臟から冴えた、高い、そして深味のある非常に靈妙な響が打出された。然し一時間を過ぎる毎に打出さるゝさしも獨特な音律と其の力とにはオーケストラの音樂家達も演奏の手をとゞめ、絕えず其響に耳傾けずには居られなかつた。

で、否應なしにワルツ踊も進行を止めた。そして悉皆愉快な心持で、浮れて居た人達を暫時呆然たらしめた。時計の諧音が響いて居る間、眩暈のする者は蒼ざめ、もつと年とつた落着のある者は幻想に混亂するやうに、又は默想するやうに、手を額に置いた。けれども反響が全く止んで仕舞ふと直ちに輕やかな笑ひが會衆の中から起つた。音樂家達は互に貌を見合せて、恰も彼等が餘り神經質に過ぎ且つ馬鹿らしかつたことを自ら嘲るかのやうに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

微笑を交した。そして次の時が鳴る迄お互に之と似たやうな微笑を洩すまいとさゝやきながら誓つた。それから又六十分經過した後（三千六百秒の時が走り過ぎた）又時計の諧音が響いて來ると又前同様、惑亂、戰慄、默想が湧いた。

然し、是等の事共には係はらず、華美な一大遊宴で有つたことは云ふ迄もない。公の趣味は獨特なもので、且つ色彩や効果に就いて立派な眼識を備へて居た。彼は單純な流行の裝飾などには一向頓着しなかつた。彼の企圖は大膽で猛烈でかつ其考案には野蠻染みた光彩が漲つて居た。或る人達は氣狂だと思つたが彼に付添ふて居る者共は決してさうだとは考えなかつた。だが、確に何等の異常もないといふことを信ずるには彼に接して見る必要がある。

此大宴樂の日に當つて七つの室の刺激的な裝飾を命令したのも、大方は自分でなさつたのでそんな假裝舞踏會に役割を與へたと同様に公が、持前の趣味から出たものであつた。勿論總て、奇怪千萬なもので、曾て Hernani で見たよりももつと多くの峻烈な、夢幻的なものや、炎え立つやうな輝きや閃きが有つた。其處には不似合な手足と身廻りの飾りをつけたアラビヤ風の人像が立つて居て、丸で狂人のやうな風體を示した有頂天な空想、美、放埒、奇々怪々、見るも怖ろしげなもの、又は胸惡くさせるやうなものなどが少なく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はなかつた。そして七つの室をあちこちと夢の群衆が實際濶歩して居たのである。そして是等の夢は其跫音の反響かと思はれるオーケストラの荒々しい音樂につれて部屋々々から色彩を奪ひながら内外をのたうち廻つた。と、再びビロードづくめの室に立て居る黒檀の時計が鳴り出した。一瞬間ハタと總てが靜まり返つて、沈默が時計の音をハッキリと傳へた。夢は一ト頻りこわばり付いたやうに立すくんだ。が然し、諧音の反響が漸く消えて行くと——たゞ一瞬時耐へて居た——輕い、半ば和らいだ笑ひが時計の音の全く絶え果てた時漂つた。そして又再び音樂が盛んになると夢は活々として前よりももつと樂しさうに三脚器から發する光線の流れるいくつかの窓の色ガラスから色彩を奪ひながら、あちこちとのたうち廻るのである。然し此七つの室の中で最西方に位して居る部屋には、今は危險を冒す假面舞踏者は一人も居ない。何ぜなら夜は沈々と更けて、血色の窓ガラスを通して、黒い帷幄の暗黒の中に赤い色の漲るのが恐ろしい上に、室内に踏み込めば、ずつと向ふの他の部屋々々で歡樂に耽つて居る人達の耳に達するよりは數倍嚴かな、力の籠つた、耳を塞ぐばかりの響がすぐ頭の上の黒檀の時計から鳴り出すのだから。

然し、他の部屋々々にはシンミリ群衆か詰め懸けて居て、いづれも心は狂熱的にはしやいて居た。そして遊宴はいよ／＼盛になつて行つたが、遂に時計が眞夜中の響を報ずる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、先刻私が話したやうに、音樂はハタと途絶えウォルッ踊の進行も靜まつた。萬物は不安のあまり以前のやうに息を詰めたのである。今、時計の鈴は十二時を打つた。して、こゝに一事件がもち上つた。と云ふのは多分踊り狂つて居た人達のこの考へ深い默想の中に時の進行と共に多くの思想が這ひ込んで來たからであらう。又、一つには最後の諧音の反響が全く靜寂の裡に消え去つて仕舞はない中に、今迄誰れ一人として氣付かなかつた一個の假面を著けた人像が現れたことを認めるだけの餘裕ある人達が群衆の中に少なからずあつたからであらう。て、此新らしい出席者の噂はそれからそれへとあたりに囁き傳へられて、遂には滿場の會衆の私語となり、驚愕となり、非難となり、果ては恐怖、戰慄、嫌惡の聲となつた。

以上私が描いて來た通り、幻の集會で、か程まで人心を興奮させたことは到底凡庸な外觀のよくするところでないことは十分に想像出來やう。實際放埒を極めた當夜の假裝會は殆んど盡くる處を知らなかつた。併し件の人像は暴行を縱にし、萬遍なく行屆いた公の禮儀にも御構なしに振舞つて居た。この上もない向ふ見ずな心にも情緒がなければ彈じられない琴線がある。生も死も等しく戯れ事としてゐる自暴自棄の徒にさへ冗談とすることの出來ない事がある。實に、滿場の來賓は今や、何の禮儀も機智もない見慣れぬ人の服裝や、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

擧動に深く感じて居るやうに思はれた。人像は瘠せて、丈高く頭から爪先迄經帷衣で包まれて居た。顏を覆ふ假面はいかに嚴密に吟味しても化の皮を顯はすことは容易でない程、硬直した死人の容貌そつくりに造られて居た。それでもまだ周圍の物狂はしい躁宴者はこれ丈のことなら稱贊しない迄も、堪へることは出來たらうけれど此假面舞踏者は今や十分赤い死の風を裝つてゐた。彼の衣裝は血で浸され廣い額も、顏面も悉く眞紅の恐怖にまみれてゐた。

プロスペロ公の視線がこの怪しい像の上に落ちた時、(あやしい像は恰かも自分の役割を十二分に果してゐるかのやうに、ゆる／＼と眞面目くさつてウォルツ踊の中をあちこちと濶歩してゐた。)最初は恐怖と不安の烈しい戰慄で痙攣を起したやうに見えたが、やがて其額は激怒に赤く燃えた。

「誰だ！ 怪しからぬ、我々を侮辱し、此神聖を瀆すものは全體何人だ！ 引捕へて假面を剝け。」公は嗄れ聲を振立てゝ近侍のものに詰問を放たられた。

斯う云はれた時、プロスペロ公が立つて居られたのは東方即ち藍色の部屋であつたが、其聲は七つの部屋を通じて聲高に、しかも明瞭に鳴り響いた。もとより公が大膽な强い人だからではあるが、彼の指圖で音樂がハタと鳴を靜めたからである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

公が蒼ざめた廷臣等と立つて居られたのは藍色の室であつた。公の言葉をきくと、最初廷臣等は時しも間近に居た件の闖入者目がけて輕卒にも突進したが、闖入者はなほも公の側へと堂々たる足取りて、靜かに歩み寄つた。全會衆の心を深く感動させたこの假面舞踏者の狂的な驕傲に伴ふ名狀し難い威風に打たれて、誰れ一人として彼を捕へやうと手だしする者はなかつた。て、何の邪魔立もなく彼は公の身邊、僅一ヤート足らずの處を安々と過ぎ、あまたの群集が衝動かなんぞのやうに部屋の眞中から壁際まで後ずさりする間に彼は、難なく否寧ろ最初から彼を際立たしてゐたあの整然として威嚴ある歩調て、藍色の部屋から紫に――紫から綠に…綠から橙色に――其處から又白に――又そこから菫色にと各々の部屋を斷乎たる逮捕の行動にさきだつて通り脫けて仕舞つた。が、間もなくプロスペロ公は憤激に、自からの片時の臆病を恥つるあまりに、心も顚倒して、慌しく六つの室を貫いて突進した。併しあらゆるものゝ上に不意に襲つて來た死せん斗りの恐怖の爲めに誰れ一人として從つて行く者はなかつた。公は引拔いた短劍を眞向に振かざして迯れ行く人像から僅三四フィトの所まで非常な速度で近付いた。人像はビロードの室の果てに突當つた時、急に向き直つて、追手と面をばつたり突合はせた。其途端、鋭い叫び聲がして短劍は黑い敷物の上に閃めきながら落ちると見る間にプロスペロ公は死骸となつて倒れ伏し

た。すると席上の群衆は絶望のあまり無鐵砲な勇氣を奮ひ起し、直ちに我と我が身を黑い室に投げ込んで、黑檀の時計の影にぢつと突立つてゐる丈高い人像を取抑へた。ところが自分等がこんな暴力をもつて取抑へた死人をのまゝな假面と經帷衣が手に觸れられるやうな何の形體も有つてゐなかつたので人々は云ひやうもない恐怖に息をはづました。

今や「赤い死」の現前は疑いない。彼は夜の盜人のやうに來た。そして會衆は自分達の宴樂の廢間で、血みどろの中に一人一人溺れて、藻掻きながら互に倒れ死んだ。かの黑檀の時計の生命も歡樂の終ると共に止んで仕舞つた。三脚器の火焰も消え果てゝ、「暗黑」と「朽爛」と「赤い死」とがあらゆるものゝ上に限りなく所有權を握つてゐる。

——完——

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

食後

水野仙

薄目に見えたランプの光りが、雨戸をひいてからは、一閑張りの茶ぶだいの上に、さも所を得たやうな落着きを見せた。鼓形なそのニッケルの臺の下に、ふちの赤い紙笠の光りのうちに包み集められたやうに、夕餉のもの丶殘りが、皿小鉢に各々の居を守つて、靜に照らし出されて居る。その外れにかけて居た肘を解いて、にぢりよりざまに長火鉢を挾んで若い夫の顔に見入つた若い妻は、折々舌に鳴るつま揚子の口つきを、もの言ひたげの、もの問はれただけの目をして凝乎と見守つた。またその新聞に落した瞳のかすかな動きを見逃さず追つて行つて、午前に目を通した三面の、あの邊この邊と胸に見積つても見る。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だがその見積りの欄が盡きても、夫の目は猶新聞を離れないのを見ると、小さな失望がどこやらに不滿の氣を波たゝせて來る。

「あア片づけて來ませう」と暫くしてからつまらなさうに言つた。けれども滿腹の懶さに強いては立たうともしないで居る。そして少しもその言葉に反響のなかつた張合ひなさから、立たうと思つた心も失せて、猶飽かず夫の顏を見贖めるのであつた。

黄金を着た二人の天使が、重さうに抱へ持つて居る小さな置時計が、茶棚の上にさゞめくやうな音を刻んで居る。それが折々或る秘密をさゝやかうとて聲をひそめるやうにも聞きなされる程、郊外の夜はまだ宵ながらもの靜かであつた。その靜かさに喰ひ入られた心はこのまゝ言葉もなく二人居るのに堪へられなくなつて、

「ね」となんとはなくも、話の緒を手繰らずには居られなくなつた。

「ねつてば!」と體を捻つて焦れ氣味に顏を覗かうとした途端、生えかけた口髭のあたりからゆるんで、笑顏になつた顏が、

「なんだい」とこちらを向いたので、いきなりその胸に縋りつきたいやうな心を押へて、

「今日お留守に眞哉さんがいらしてよ、あなたによろしくつて、相變らず元氣なことばかり言つて居た」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「さう幾時頃？」
「さうね、おひる少し過ぎから夕方まで居ましたよ、あなたに會つてらつしやいつて私が言つたものだから、その積りで待つてたんですけれど、今日はまた生憎貴方は遲いんですもの」
「久しぶりで嬉しかつたらう、僕は早くかへらないでよかつた」
「あら！何故？」
「なぜつて知れてるぢやないか…………糸さんの戀人だもの、ね」
「知らない！」
「ほんとのことを言はれると直ぐ知らないだ」
「いゝわ！」
「おいてなすつた」
「いやだ私もう…………」
「ハヽヽヽハヽヽヽ、だつてさうぢやないか」
「ようござんすよッもう」顏をうづめた兩袖の中に聲が慄へた。豫期しなかつた有樣に、男は一寸口を噤んだが、飽くまでも笑談にしてしまはうと、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「思ひ出してるの？」と聲を耳の傍に低くよせて袖のはしをちよいと引く。

「………………」

いきなり女は雨手をパッとはづして、片手でぐいと男の胸を押した。不意打ちに落着けて居なかつた腰がぐら／＼として、

「どつこい／＼」と踏みこたへる間もなく、ぐい／＼と押して來る。取り直してその手首を押へて、ほんのりと赤くなつて耳たぶのあたりから、やんちやらしく眉のあたりに皺をよせたのまで見て取ると

「ハヽヽハヽヽヽヽ」と笑ひつゝしかと握つた手に男は漸々と力を入れて行つた。

「………………」

「………………」

女の顔は次第に和いて行つた。

男は益々その掌に力を籠めて。

「相撲を取つたら私負けるか知ら」と女は甘へるやうに突如としてから言つた。

「きまつてるさ！」

「噓！私負けないわ必と」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「馬鹿いつてらア、そんなちつぽけな體をして」
「いくら小さいだつて力があるわ」
「馬鹿だね、男が女に負けて堪るもんかい」
「どうせ馬鹿ですわ」
「そら〳〵初つた〳〵ハヽヽヽそれぢやア論より證據だ、一つやつて見よう」
「いや私」
「なぜ？」
「なぜでも」
「やアい、負けさうなもんだから」
「嘘よ、嘘よ、いゝわそれぢや負けないわ負けるもんですか」と女は彈かれたやうに起ち上つた。
「危い、その茶ぶだいをもつとそちらへやり給へ」
ほつほつと揺れて、疊をずつて行く一閑張りの上にランプは瞬いた。
「さア」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二つの體が組んで、右に搖れ、左に傾き、危く後に倒されさうになつては、うんとこたへてまた前にのめりさうになつて居たが、やがて譯もなく女の體は横だふれに倒された。

「どうだい」

「負けないわ」

「強情な女だなア、負けても負けないつて法があるもんか」

「だつて負けないわ」

「よし、それぢやも一度投げてやる」

「…………」

「…………」

「…………」

「眼鏡がこわれる、お取んなさい」

「…………」

「負けるもんですか！」

「ハ、、、、」

「負けるもんですか！」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「…………こうれてもか…………」

「…………あゝつ」

「そら今度は降參したらう」

「負けないわ…………負けない、負けない」

「馬鹿だね」と男は笑ひ〳〵手を外して、凝乎と足許に横はつた女を見下した。ゆるんだ懷に波打つて見える息を制しがてに、傾いた丸髷を疊に置いて、

「負けない、負けない、負けなァい…………」と言ひ續けて居る。頰にのぼつた血の色に見ても、激した感情に女がだん〳〵ヒステリックになつて居るのが知れた

山のやうな息が離れ〳〵に二つの胸に打つた。間をおけば間をおくだけ、その息の高まるやうに覺えて、怪しく兩肢の慄へを男の覺えた時、

「負けない！」と言ひさま女はかはと起つて兩手を男の背に廻した。けれども萎えた力に踏み應へる間も少く、どうと諸共に倒れるのであつた。

「…………」

「…………」

暫くは動かぬ體と體に、胸ばかりが烈しく波を打つた。ふと女の頰にあたゝかき濕りを

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

覺えると、風を起すやうな鼻息がその耳もとを掠めるのであつた。衣と衣を通す肌のあたゝかみを、ほのかに意識しつゝ女は再び

「負けない！」と聲低く叫んだ。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜社の人々

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

正月二十一日と云ふ日曜日大森森ヶ崎の富士川で新年會をした。在京社員全體とは行かなかつたが、松村とし、武市綾、小磯とし、長沼智惠、荒木郁、林千歲、宮城房、らいてう、白雨等が午前から初大師の人の波を押し分けて、集つたので樂しい、盛んな會合だつた。

會合は翌日の午前二時頃迄續いた。女の世界、全世界の女は皆幸福な者としか思へなかつた。

午前中は火鉢を圍んで、話して居た連中も白雨を中心にした碁三昧の連中もあつたが、午後からは誰れ一人として火鉢や碁盤を見かへるものもなかつた。

荒木氏の厚意の麥酒とお肴とが不思議な魅力を有つて居たのだ。

會合は午後から夜にかけて花を咲かせた。當日の御主人役の荒木氏のお働きぶりは目醒しいものだつた。

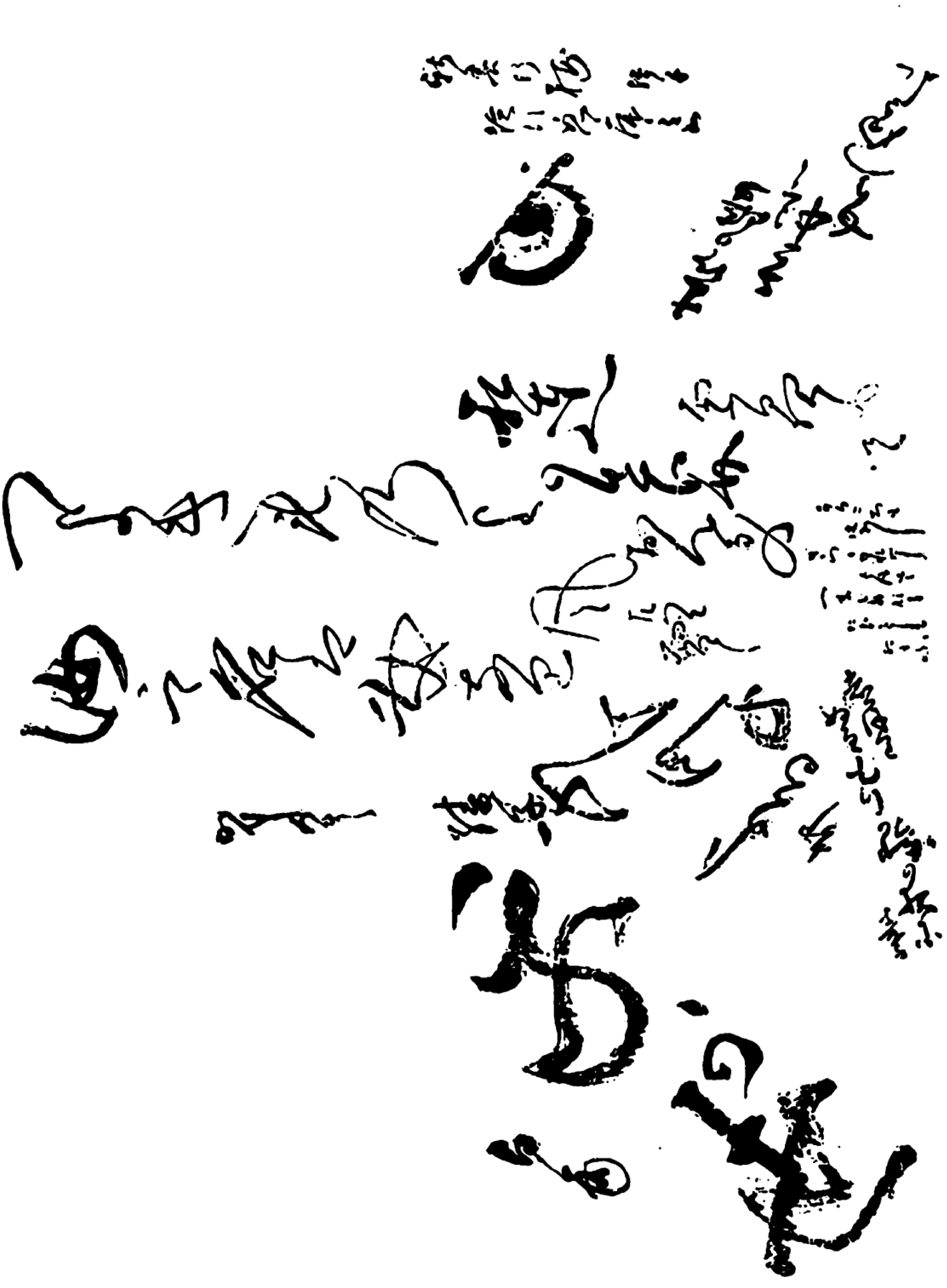
皆は荒木氏のお誕生日を祝した。同じ月の三十日のお誕生日を特に青鞜社員の爲に今日に繰上げて下さつたのである。

其時、らいてう氏は寄せ書きの白紙に「酒めし」と大きく書いた。昨年來の風邪で昨日まで寢て居た物臭のらいてう氏にはこれが書き初めなのださうな。

「強きものよ汝の名は女なり」と次に武市氏が書く。

長沼氏と荒木氏とらいてう氏と林氏とはいつまでも泡立つコップに未練を殘して席を立たない。「ええヽヽ、えさうです、さうです、それです」と我が意を得た人の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

話を幽に胸息をはづませながら、受け取るは朦朧體の長沼氏で生れて以來青空を見た事がないと云つた樣子に、顏を火鉢より低く垂れて、ぐつたりと川土左宜敷、夢のやうに話しては皆んなを惱した。

「あたし鏡花が大好き、エヽ夏目さんも好きよ、けれどもまだ他に今の若手で二人好きな人があるの、それはおしくてとても云へないわ、」前に延した首は三間も先きの方でから云つた。撫で肩すらりつと着流した羽織を後にさばいて、品を作つて、こゝみがたに顎をつき出して居る。時々白い齒を見せて笑ふ鏡花式の、はなやかな方は宮城氏で、長沼氏と相隣り、一つの火鉢に睦じそうだつた。

及例によつて例の如く、定規で描いた人形か、さなくば、寒さに凍つた飴細工か、一人異彩を放つて剛直不動に座つて居たのは音に名高い、らいてう氏だ、發言の前には、規則のやうに輕く握つた右手を口元にかざして、悠然と自尊の聲を放つ。皆さん御會ひの節此の癖を見遁し給ふな。

らいてう氏と宮城 氏との間に居るのが小さい林氏で、眼元のいゝ、張りのある團栗眼玉を上げてはチョイ／＼と表情的に人を見る癖も惡くはない。引緊つた筋肉の、全體に小さい面長の顏を美しく引つ立たせて居るのは頤ひ付きたい程立派な、隆々たる鼻だ、一寸中央に小さい黑子のあるのも愛嬌だつた。

凉しい眼で作つた笑顏に絕えず人の話をフウン、フウンと嬉しそうに鼻先きに輕く受けて、矜持らしく口を左にねぢつては唇を嚙む癖のあるのはらいてう氏の隣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に居る荒木氏だつた。なくて七癖とやら、一寸ものを考へる時は一方の手を懐に入れて、握つた右手の人指を解いて、鼻先にかざし、下を向いて、上下に動かすのも見のがしてはならぬ荒木氏の癖だつた。どこやら世話女房と云つた様子のあるのも妙だ。

おとなしいのは小磯氏で始めから、無言の行を續けて大關の白雨と好一對に、仲よく、火鉢を抱へて圓く陣取つた。

白雨は女星亭と云つた形で一座の歡樂を傍觀してゐるやうだ。人見は何だが怖いけれど、實は次第に暖まる足の霜やけを氣にして内密でそつと掻いてゐるのだ。

長沼氏、荒木氏らいてう氏の間に繪の話が交換された。林氏荒木氏等の間には芝居の話も盛に出た。そろ〱隱藝がはじまる。皮切はいつも荒木氏だ。三味線がなければ、とか何とか難題を持ち出すのは長沼氏だ。

夜に入つて急に驟雨が襲つた。若い人達は歸れないので青くなつた。二時間も經つたと思ふ頃、先刻歸られた林氏は停留所から引返して來た。來る電車も來る電車も滿員で一度だつて山谷で停まらない、二時間立坊して待つて居たが、歸れさうにない、次第に夜寒に襲はれて來るので思ひ切つて泊るつもりで引返したとのことだ。皆んな急に電報やら電話やらで大騷ぎだつたが、三人丈は雨の止むと共に遲く歸つた。

今日は初大師で大變な人出の上に、雨と來たから、品川間は夜中こんな風なのだらうと斷念してあと三人は泊ることにし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。荒木氏獨りよろこぶ。

殘された四人は歌留多を始めた。むつかしい書きぶりに、讀みなづてんは取りつこした。四人とも上手さ（？）加減は同じ位だつた。鑛泉に入つて、枕を並べて話しながら夜明頃に寢た。吉原雀は小さい聲で喋舌り續けて皆をねかさない。が、らいてうは狸寐だらう、何と話しかけても返事をしない。ふと畫寫眞をとつた時、「どうすれば美人らしく見えるでせう」と長沼氏を捕へて眞顔に訊いて居たのを思出して可笑しくなると共に、脱がさうとする荒木氏のコートを襠のやうに引つかけた海月のやうな長沼氏の姿が目に浮んだ。

◎研究會並びに青鞜に關する御希望や、御要求は御遠慮なく直接本社宛に御申越し下さい。

◎毎土曜日午後を面會日と定めましたから本社へ御話に御出て下さい。

◎本社は目下可成貧乏して居ります。多少に關らず皆様の御寄附を歡迎いたします。

◎社員は毎月十五日迄に社費三十錢を御忘れなく御納め下さい。

◎社員の方には隨時原稿を本社宛に御送り下さい。原稿に十行二十字詰の事

◎物集和氏母君舊臘より御病氣の處御養生叶はせられず去る一月十二日遂に御逝去になりました。本社は總代として木内氏に御會葬を御願ひ申ました。

◎國木田治子氏は赤坂田町七丁目の御私宅にて毎月一六の夜、松月古流生花挿入花、及千家表元膝庵打瀬翁輔助の下に御指南せられます。

◎九月以來正月迄青鞜社に御寄附下された方々におくればせながら受取のしるしを兼ねこゝに御禮を申上げます

◎寄附金總計　五拾壹圓四十錢也

◎寄附者名簿、市原つぎえ、小林いく、上田朝、前田きせ、平塚孝、多賀巳都、大村かよ、荒木郁、蒲原房枝、潘しん、松井百合、

◎研究會も二月から始めます。社員外の婦人でも、御志望の方は出席隨意ですから詳しいことは本社に御問合せ下さい。

◎瀨沼夏葉氏も本社の爲に御盡力下さることになりました。脚本ワーニヤは數回御連載の答で御座います。

本號責任者　木内錠
保持研

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三月號豫告

叔父ワーニヤ（脚本）	瀬沼夏葉譯
	チエホフ作
詩	與謝野晶
（エロスとチャーミオンの對話）	ポオ
小說	森しげ
同上	岡田八千代
同上	中野初
俳句	白雨
いと狹き門戸（感想）	らいてう
イブセンの「幽靈」を論ず	林千歳
	荒木郁
	其他社員
同上	メレジコウスキー

青鞜社概則

第一條　本社は女流文學の發達を計り各自天賦の特性を發揮せしめ他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條　本社を青鞜社と稱す。

第三條　本社事務所を本郷區駒込林町九番地物集方に置く。

第四條　本社は社員賛助員客員よりなる。

第五條　本社の目的に賛同したる女流文學者、將來女流文學者たらんとする者及び文學愛好の女子は人種を問はず社員とす。本社の目的に賛同したる男子にして社員の尊敬するに足ると認めたる人に限り客員とす。

第六條　本社の目的を達する爲め左の事業をなす。

一、毎月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。青鞜は社員及び賛助員の創作、評論、其他客員の批評等も掲載することあるべし。

二、毎月一回社員の修養及び研究會を開くこと但し賛助員の出席隨意たるべし。

三、毎年一回大會を開くこと大會には賛助員客員を招待し講話を請ふことあるべし。

四、時に旅行を催すこと。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第七條　社員は社費凡三拾錢を毎月納附すべし。社費は毎月會並に大會の費用と社員、贊助員、;客員への雜誌靑鞜寄贈費とに當るものとす。
第八條　雜誌「靑鞜」發刊の經費は發起人の支出により、其維持は社員、贊助員、客員其他の寄附による。
第九條　幹部は編輯係、庶務係、會計係よりなる。
第十條　係員は四人とし、半數づゝ一年毎に交代す。最初は發起人等是に當る。
第十一條　係員は社員の選擧によるものとす
第十二條　係員は再選することを得。

本社の爲に御助力せらるゝ方及社員名簿

長谷川時雨　岡田八千代
加藤[illegible]　與謝野晶
國木田治　小金井喜美
森しげ　瀨沼夏葉
尾島菊　田村俊
茅野稚　山田百合
井上民　岩野清
戶澤はつ　大村かよ
大竹雅　加藤みどり
神崎恒　上田君
田原祐　上野朗

上野葉　御清笑
山本龍　松井百合
小林歌津　河久根俊
荒木郁　佐久間時
水野仙　松本正生
鈴木かほろ　岡本かの
永安まつ　小磯とし
多賀巳都　松村とし
長沼智惠　石井光
江木榮　田澤操
舟曳みき　林千歲
尾竹かつえ　蒲原房枝
宮城ふさ　牧野君江
岩岡菊　岩淵百合
武市綾　富島巴

係員

中野初
保持研
平塚明
木內錠
物集和

豫告

青鞜社同人譯

ポオ散文詩集

青鞜社出版

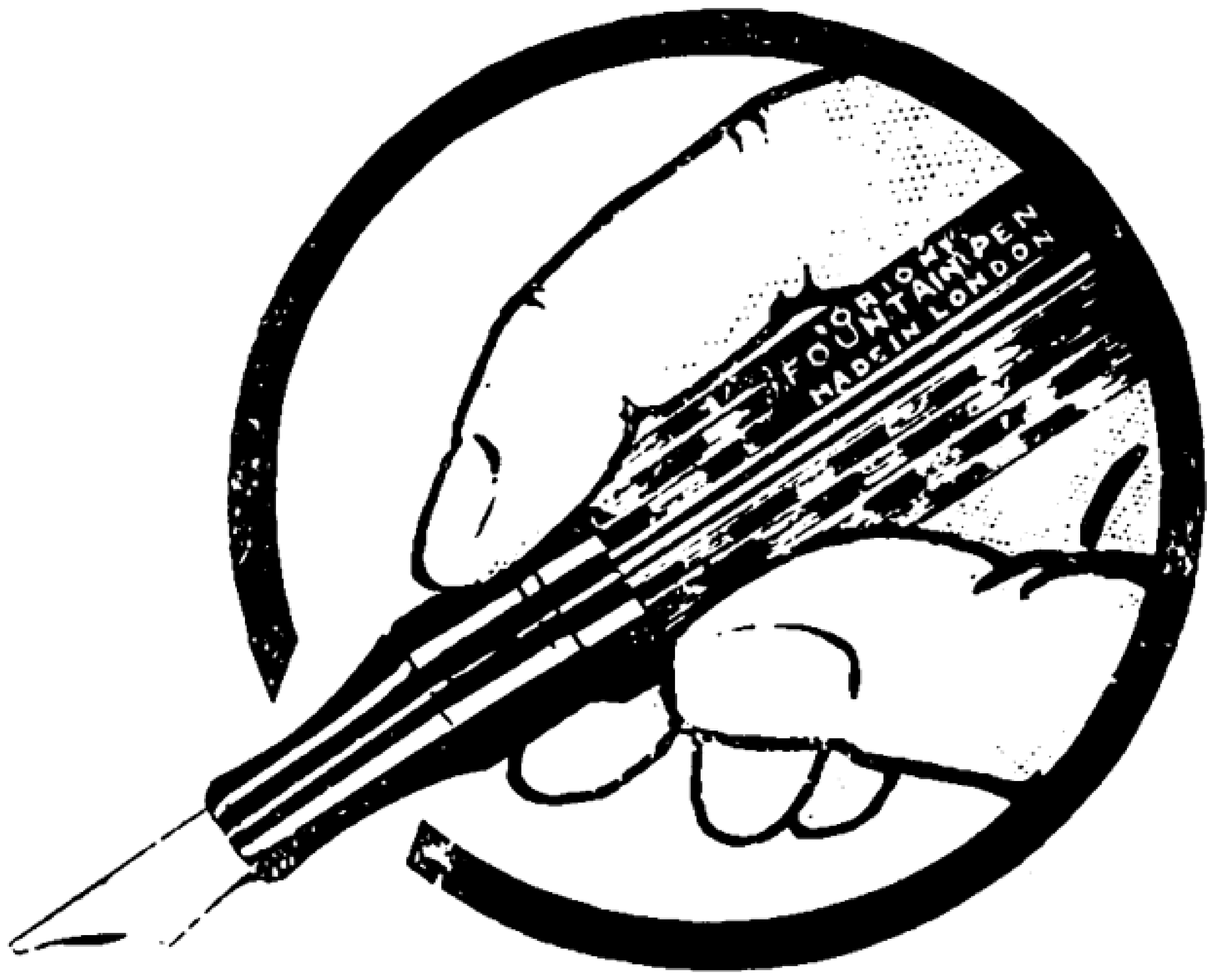
寄贈書目

春のみつぎ　百田楓花著
春のゆめ　福田夕咲著
南方の花　近藤元著

雜誌

早稻田文學(新年號)　早稻田文學社
スバル(新年號)　昴發行所
朱欒(新年號)　東雲堂
三田文學(新年號)　三田文學會
みづゑ(新年號)　みづゑ社
劇と詩(新年號)　劇と詩社
ホトヽギス(新年號)　ホトヽギス發行所
層雲(新年號)　層雲社
俳味(新年號)　俳味社
藝文(新年號)　鵠聲堂
シバヰ(新年號)　シバヰ發行所
女子女壇(新年號)　女子文壇社
アラヽギ(新年號)　東京根岸短歌會發行
新婦人(新年號)　聚精堂
臺灣愛國婦人(新年號)　臺灣愛國婦人會內
歌舞伎(新年號)　歌舞伎發行所
紅塔(新年號)　紅塔社
北斗(新年號)　北斗社
無弦燈(新年號)　無弦燈社
東洋時論(新年號)　東洋經濟新報社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



オノト萬年筆

飾無きものは金六圓以上
飾有るものは金七圓以上

オリオン萬年筆

十四金ペン金二圓八拾錢
同（金鍍金飾付）金三圓廿五錢

東京日本橋通
大阪心齋橋筋
京都三條通

丸善株式會社

九段（中坂上角）

長谷川寫眞館

館主　長谷川武七

（電話番町一二四五番）

村井弦齋著　増補註釋　食道樂　全一冊　春の卷　夏の卷　秋の卷　冬の卷（合本）　定價金二圓　郵税金八十錢

村井弦齋著　増補註釋　食道樂　續篇　春の卷　夏の卷　秋の卷　冬の卷　全各卷四冊　定價各卷八十錢　郵税十錢

村井弦齋著　増補訂正　臺所重寶記　全一冊　定價金一圓　郵税金十二錢

赤堀松吉　赤堀峰吉　赤堀菊子共著　家庭應用　洋食五百種　全一冊　定價金七十五錢　郵税金十二錢

赤堀吉松　赤堀峰吉　赤堀菊子共著　家庭應用　惣菜五百種　全一冊　定價金七十五錢　郵税金十二錢

故久保田米僊著　同息米齋、金僊畫　年中惣菜　全一冊　定價金八十錢　郵税金十二錢

故久保田米僊選　毎日の惣菜案内　全一冊　定價金十錢　郵税金二錢

故久保田米僊著　同息米齋、金僊畫　茶の湯の心得　附 茶席料理　全一冊　定價金八十錢　郵税金六錢

赤堀吉松閲　奥村繁次郎著　諸國名物料理　全一冊　定價金四十錢　郵税金六錢

發行所　東京市銀座大通新橋際　振替貯金東京二〇〇番　新橋堂書店

眺望佳絶

即席そば料理

菊そば

其他御好みに應ず

春は花見に

夏は朝顔

大瀧ありて納涼によし

四季の草花を陳列し御高覧に供す

秋は菊見に

冬は雪見に

四季共によろし

梅壽樓

團子坂中腹

菊そば本店

電下三八五七番

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

利は元に有ばこそ　現金出して安く仕入れて

紋羽二重　平羽二重
朱子羽二重　梨地羽二重
御裏地用羽二重　造花用羽二重
刺繡用羽二重　畫絹

羽二重

京御召
縮緬

弊店は羽二重の生産地たる越前福井に製織工場を有し直接の卸直段なれば他の小賣店よりは慥に二三割安價に有之候
御染物は熟練なる染屋と特別廉價の契約有れば無手數にて御便宜に調進可仕候

東京市神田區西小川町一丁目十三番地
島田織物會社出張所
羽二重屋商店
電話本局三七八三番
（電話帳にはの部羽二重屋と御引用被下度候）

お召は京都西陣製品縮緬は近江國長濱製品の精撰したる品を取扱居候
御用命の節は電話又は**はがき**にて仰聽候へば直に持參御覽に入れ可申候

貸して小言を云ふよりも　いつも笑て入れる現金

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最良髮油

みやけ油

登錄商標

東京人形町通

木村三宅堂

家庭重寶

專賣特許一一二九八

粉末石鹼

發賣元

東京市日本橋區人形町通

木村三宅堂

電話浪花六二〇振替口座八七五一番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

●與謝野晶子女史著●藤島畫伯裝訂圖案

△中判箱入天金付美本

△定價金壹圓 △不要郵稅

發兌所

本郷區本郷四丁目八
振替口座一四五三二
電話下谷八一六

有朋館

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

慶應大學講師 戸川秋骨先生譯

エマーソン論文集

▲總クロース金字入高雅美本

下巻出來

下巻 正價一圓二十錢 郵税十二錢
上巻 正價一圓四十錢 郵税十四錢

十九世紀に於ける論文家を擧ぐれは誰か先づ指をエマーソンに屈せざらん也。彼の思想は高遠なり、彼は體系を備へざる一大哲學者也、彼の文字は金玉也、彼を韻律を挿まざる一大詩人といふも亦可、エマーソンの論文は洵に近代思想界の一大産物にして、之を知らざる者は以て文學を語るの權利なき者也。本書はエマーソンの心醉家を以て自任する戸川先生の譯に係る、其譯文の的確にして能くエマーソンの神髄を得たる者なること言を待たず、彼の曠世の哲人の風神に接し其教訓に聽かんと欲する者は須く一本を座右に備へよ。

下巻目次

●詩人論 ●作法論 ●政治論
●經驗論 ●進物論 ●名目論及實在論
●人格論 ●自然論 ●改革者論

上巻目次

●歷史論 ●戀愛論 ●大靈論
●自恃論 ●友情論 ●圓環論
●報償論 ●細慮論 ●智力論
●靈法論 ●勇壯論 ●藝術論

發行所 東京神田雉子町 振替第七九九五 玄黃社 ●全國書店取次

貳月一日發行

スバル

價三十錢
郵税二錢

小說散文

—執筆者—

平野萬里
森鷗外
茅野蕭々
井岡佐二郎
江南文三
吉井勇
山本禿坪
阿部二郎
川村資郎
松本秦
谷崎潤一郎
水上瀧太郎

むく鳥通信

無名氏

短評

與謝野晶子
原田琴子
茅野雅子
三ヶ島葭子

—表畫—

東京神田
電話本局

昴發行所

北神保町二
四二六四番

清新なる文藝雜誌

毎月一回 一日發行

詩と劇

定價一部 貳拾五錢

二月號要目

譯詩七篇…(詩)……昇曙夢
書祭の齊…(歌)……若山牧水
ジエー、エムシンヂー…(評論)……仲田勝之助
デールマンの詩風…(評論)……秋元蘆風

有樂座の廊下…(感想)……仲木貞一
補助費と女…(戯曲)……服部搭歌
雛頭…(詩)……山村暮鳥
焦點…(詩)……白鳥省吾
ひるの日…(詩)……西宮藤朝

辨天小僧の足…(小説)……上司小劍
おびえ…(小説)……谷崎精二
太陽の子…(戯曲)……秦豐吉譯
桃われのほつれ…(小説)……小澤久雄
曉の窓…(小説)……小川未明

惡黨…(小説)……薄田斬雲
法界屋…(詩)……福田夕咲
途中にて…(歌)……土岐哀果
海岸の春…(小説)……福永挽歌

一月の創作…(批評)……同人
表紙畫…(木版)……山下新太郎
挿畫…(木版)……坂本繁二郎
裏繪…(木版)……柳敬助

福田夕咲氏著 詩集 春の夢 新刊發賣
四六版美裝 二百三十頁 價七十五錢
發行所 日本橋區檜物町八 文星堂

小澤久雄氏著 小說 流水 新刊發賣
四六版美裝 二百三十頁 價七十五錢
發行所 劇と詩社

發行所 東京小石川區小日向臺町三ノ四六 劇と詩社 | 發賣所 東京神田表神保町 東京堂

第五卷第二號

アララギ

二月一日發行

守の家（小説）……伊藤左千夫
折にふれて……齋藤茂吉
野の窓より……柿乃村人
暗き遠路……土屋文明
初きらはれ（チエホフ）……なた
我が命……長塚節
長短歌……蕨眞
新年の歌……千樫
京都のこと、その女女のこと（小説）……中村憲吉
野尻湖……篠原志都兒
アララギ歌壇……岡千里
信濃の歌……庭汐子等
餘錄……古泉千樫
新短歌抄（評釋）……アララギ同人

定價一部十五錢○半年八十五錢○一年一圓六十錢（共稅）

本所區茅場町 東京根岸短歌會 三丁目十八番地

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二月の巻發行　定價　一册二十八錢郵税二錢五厘　六册前金郵税共壹圓七拾錢

新婦人

忘れられぬ男 忘れられぬ女

笹川臨風　柳川春葉　青柳有美　廣津柳浪　初瀬浪子　森眞如女史　上山浦路子　小島文子

兒玉花外　泉鏡花　後藤宙外　森田草平　長谷川時雨　尾島菊子　森律子

（以上執筆者）

繪畫及寫眞版

飛び梅 あるじなしとて春なわすれそ……川村清雄筆

九州第一梅 今夜君の爲に開く……石川寅治筆

美人駿馬に伴ふ 人は絶代の名媛 馬は天下の駿足……ーハタ イア 實寫眞

有栖川宮妃殿下 **桂公爵**令嗣夫人●戸澤子爵令嬢●佐々木博士令嬢●加藤博士令姪●吉田廣藏氏令嬢●伊勢眞弓たづ子嬢 松木工學士夫人 **壺屋**藤田敬美氏夫人●名古屋三輪丸子嬢●井內泰子嬢●奥田誠二氏夫人●河野きく子嬢●貝塚八重子嬢●松田代議士夫人●高木文學士夫人松井すま子●上山浦路子嬢●横濱高野眞三氏夫人●横濱山田梅子嬢●夢野千草嬢●眞砂來新女優花村三枝子嬢●甲府武井よし子嬢●横濱齋藤龍子嬢外百餘圖●●●●●●●●

結婚と肉體の詮義（林田書記官長）樂しき新婚旅行（三輪田學士）ロンドンの娘子軍（内崎文學士）箏曲を習ふ人に（今井慶松）狸の趣味（尾崎恒子）煩悶と運命と慰安（石橋臥波）徳川時代の女傑（岡部精一）

憚られたる姉の日記……故一葉女史令妹　樋口邦子

卷末附錄 **家庭日誌** 二月分

温度表晴雨表献立表來客控●九星舊暦添

見本 册 郵券二錢　賣捌所は全國著名の書林雜誌店

發行所　東京市本郷區龍岡町　振替東京三〇五八番　**聚精堂**　電話下谷一六七二番　電話下谷四〇七九番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

劇壇の新聲

毎月一回 一日發行

シバヰ

定價廿五錢 郵税壹錢五厘

第壹卷第貳號

二月號內容

■●月の劇評
本郷座の新派劇……大伍
歌舞伎座の『竹取物語』……燕の賓
役者の『竹取物語』評……虎太郎
『時雨の炬燵』の讃美……陶円郎
初春の市村座……三太郎
齋人老人の『質店』……一丁生
■アイルランド劇の半面(評論)……河野ゆづる
■夢遊病者 戯曲……灰野庄平
■新らしき劇の為めに(評論)……二丁生
■伯爵令孃(戯曲)……島村民藏
■箱根日記(小品)……秋田雨雀
■劇場印象記(小品)……中谷德太郎
■死の前に(戯曲)……楠山正雄
■Vin S.berin(海外通信)……坪内士行
■第四の壁(海外劇壇消息)……三太
、創作と評論(評論)……甲鳥
■紙芝居(評論)……木場町生
■机上舞臺(雜錄)……編輯同人
■挿畫
各座一月狂言舞臺面と扮裝
愛蘭劇の作者と俳優及び舞臺面
ゴルドン、クレエグ意匠『マクベス』の舞臺裝飾
倫敦に於ける歌劇『リオ、ヴァアデス』舞臺面其他

東京市牛込區 シバヰ發行所 西五軒町四拾壹番地

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

これのみは人の國よりつたはらて神代をうけししきしまの道

心の花

二月號

第十六卷 第二號

少アイヨルフ　草野柴二
秋晴　岡野千代子
弦の音　長紅雪
竹根好忠　鴻巣盛廣
萬葉集講義　佐佐木信綱
古今集の歌風　次田潤
眼つぶらに　新井洸太郎
蘆の湖まで　川田順
春の雪　竹柏園主人

定價一部金十二錢郵税一錢●半年前金七十五錢

東京日本橋區 竹柏會出版部 本石町一ノ一
振替東京四三〇〇番

敷しまの歌あらす田あれにけりあらすき反せ歌のあらす田

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

鷺の啼けば何やらなつかしう　鬼貫

俳味

二月號

入らぬかと思へば……（卷頭語）
俳諧數奇傳……田岡嶺雲
私解芭蕉の發句（八）……沼波瓊音
俳諧にし東……文學博士 新村出
評點五十句……酒井野梅
鞠……小倉鶴峰
夜店の俳味……安達米青
事實より……長尾素枝
「見たら木兎」を讀みて……木村恒
唐辛子……（懸賞俳句）

要目

芭蕉と若衆……內藤鳴雪
芭蕉時代の姿の意義……安藤和風
月並の研究……咀訶子
阿那律（小說）……長尾素枝
秋の日……野崎小蟹
女……（懸賞文章）
雪曉論……記者
通り雲……レモン法師
口繪（自畫讃梅）……士朗筆

附錄

去來發句集……

每月一日一回發行

定價
一部 金拾貳錢　郵稅 壹錢
半年分前金 稅共 金六拾八錢
一年分前金 郵稅共 壹圓參拾貳錢

發行所
東京市本郷西片町拾番地
俳味社
振替口座 東京參四參四番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵稅一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百四十號（二月一日發行）

六冊前金郵稅共一圓五十錢
十二冊二圓八十錢

藝の工夫といふ事……島村抱月
吉右衛門が「松王」の型……森ほのほ
市村座の中幕……ほのほ生
演藝同志會のイブセン劇……秋田雨雀
「幽霊」を見て……高安月郊
「幽霊」と「手袋」の所……佐々木信綱
本郷座を觀て……林和生
長唄と三重……武田露丈
「黄金五枚」に就て……塚原澁柿園
戯曲 僧院（フェルハアレン作）……鷗外譯
脚本 手袋（ビヨルンソン作）……鷗外譯
帝國劇場の一番目……伊原青々園
新富座合評（青々園、芹影女、時雨女）……
新年の脚本界……川村花菱
しばゐ塵塚……關太郎
「竹取物語」に就て……長谷川時雨
「品川の臺場」に就て……岡本綺堂
新年の小劇場（幸堂、壽山、春浦）……
羽左衛門の藝……伽羅五城
劇壇時事……一觀者

本郷區湯島切通坂町諧報社内
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三
振替口座一八一〇六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊藝文雜誌

明治四十五年　二月號　二月一日發行

定價一部郵稅共廿二錢。半年分一圓廿錢。一年分二圓卌錢

「藝文」は京都帝國大學内京都文學會の機關雜誌にして東西兩洋の學術文藝に對し最も謹嚴深刻の批判を下さむとするものなり

文部省美術展覽會に於ける東西の日本畫　文學博士　松本亦太郎

支那上古の地誌として禹貢と山海經の價値　理學博士　小川琢治

鎌倉時代の女流政治家　文學博士　三浦周行

彌天道安論　文學士　羽谷了諦

格調、神韻、性靈、の三詩説を論ず　文學士　鈴木虎雄

肉體の秋（イエイツ）　竹友藻風

實行と藝術　細田枯萍

うもれ木　文學士　藤井乙男

源實朝自筆書狀　口繪

「藝文」第二年總目錄　附錄

發行所　東京小石川原町六　振替東京一三五三　電話番町二六〇八　鷄聲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女子文壇

二月一日發刊（第八年第二號）二月普通號　定價拾五錢　送料一錢五厘

◎婦人は感ずること強く考ふること鈍き者なりや……女子高等師範教授 吉田熊次

▲三馬の浮世風呂……文學博士 幸田露伴

◎歩きぶりの内輪と外輪……澤田順次郎

▲女性の妊孕力（二）……大阪高等醫學教授 田中祐吉

●電燈のあかり……兒玉花外

●饒舌……花日向葵

◉王妃と薔薇……森川葵村

●オキザリスの花……佐々木好母

◎壁畫の話（つゞき）……文學士 澤村胡夷

▲光源氏の一生（下）……外島浪之介

◎古事記を讀む……横瀬夜雨

◉耳袋……猿丸太夫

◉閻覺一口淨瑠璃番附……長曾我部菊

◉徒勞……長曾我部菊

●夜……若杉濱子

●一人の價値……太田喜志子

●終の夢……河野はやぶさ

●京都の町……廣江曉子

◎化粧問答……藤波芙蓉

●小說●散文●詩●和歌●俳句●初作等創作盛觀

東京市京橋區大鋸町十二　女子文壇社出版　（振替貯金口座東京第七九壹貳番）　賣捌各地書店

毎月一回 高評如湧・實益と修養を兼たる家庭雜誌 一日發行

新女學

四六倍判 二月一日發行 第貳號 廿八錢 郵税二錢五厘 半年前金郵税共一圓六十八錢 一年前金郵税共三圓二十四錢

(卷頭)

梅林 三色版 中倉玉翠筆

柳に鶯 邦畫手本 石版着色 菊池芳文筆

編物模樣圖按 着色石版

梅花の歌 習字手本 石版 岡山高陰筆

■臺所物理學 東京帝國大學敎授 理學博士 中村清二

(裝飾)

祝賀三十三所布接合圖按

光琳式梅形銀貨入型紙

ホワイトシヤツの型紙

外寫眞版十七種

■婦人の修養 内務次官 床次竹二郎

◉女大學主義と自由主義……上原六四郎

◉日本の婦人は色彩の智識に乏しい……白濱徵

◉趣味と手藝を學ぶ女の學生……谷紀三郎

◉時間の活用……川島芳子

◉動物の面白き研究……羽原又吉

◉淺草海苔の話……速水不染

◉小兒人工營養法……山中甲子

◉大和屋のホワイトシヤツの縫方……伊藤文子

◉古代服十二一重の仕立方……金子とう子

◉足袋の仕立方(第一號附錄參照)……内田ゆきき子

◉光琳式梅花形銀貨入の拵へ方……加藤長次郎

◉還暦の壽三十三所布の模樣接ぎ方……木多きみ子

◉編絲の色を變へて模樣を編出す法……濱野そめ子

◉八重の白梅の造花法……金子支江子

◉誰にも出來る生花の法……かみつれ女史

◉習字には如何なる心得を要するか……臨池軒主人

◉思附の簡便炊事法……山村雪子

◉兒童の精力を面白く活用した一例……野口復堂

梅▲火災豫防の一法▲貞婦大木たき子夫人を訪ふ▲子供に就いての可笑かつた實例▲東京各女學校一覽▲バテンに就いて▲花籠▲和歌及俳句▲米屋に就いての經驗▲能書家川村葉香女史▲編輯部より▲二月の家庭暦等

◎懸賞募集(和歌 俳句) 佐々木信綱 内藤鳴雪

■立派な人間を造る最良の敎育法 江原素六■

發行所 東京日本橋角 大倉書店 振替貯金東京二三八 電話本局四一一・四二・四〇四 賣捌 全國各地書店

昭和43年9月15日発行　【第2回配本】

青鞜　第2巻（第1分冊）

編著者　平塚　らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
V.2
no.2

University of Colorado at Boulder
U18400 5746149

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

○毎月一回一日發行
○定價一册金貳拾五錢 ―郵税壹錢五厘―
○原稿〆切期日は毎月十日限とす。
○前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢
(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓
○廣告料 (一頁)拾五圓 (半頁)八圓
○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。
○振替貯金(東京口座一一六〇)に拂込まれたし
○郵券代用は一錢切手に限る(但し一割増のこと)

明治四十五年一月二十八日印刷納本
明治四十五年二月 一 日發 行

東京市本郷區駒込林町九番地 青鞜社内
編輯兼發行人 中野初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人 島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所 三秀舍

禁轉載

發行所 東京本郷區駒込林町九番地 青鞜社
(電話下谷三七七六)
振替東京口座一一六〇番

發賣所 東京市神田區表神保町三番地 東京堂
電話本局(一二四)(三二八)

阿母さん
阿姉さん
早く出て
御覧よ
お好きなものが
出来ました
圓く圓く
まん圓く

クラブ洗粉
クラブ白粉
クラブはみがき
クラブ美身クリーム
クラブ美髪用ホマート

クラブ化粧水
クラブ粉白粉
クラブ水白粉
クラブねり白粉

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER